

創立百二十五周年記念誌

# 校庭いづこまで

秋田大学教育文化学部附属小学校 拾華会

令和七年十月



タイトル文字

拾華会 会長 相場 郁子

(S五十二年四月～S五十五年三月)

寄稿文中の挿絵

拾華会

羽 深 進

(S五十七年四月～S六十三年三月)

写真提供 (表紙・裏表紙)

岩田 写真館

ご挨拶



華をたずねん

華を愛さん

会長 相場郁子

拾華会は、秋田大学教育文化学部附属小学校に勤務した教職員の会で、明治三十三年に発足して、今年で百二十五周年を迎えることができました。例年通りであれば、百二十周年を実施すべきところでしたが、コロナ禍にあり延期せざるを得ませんでした。

附属小学校は、明治七年の太平学校の附属校から始まり、昨年創立百五十周年を迎えました。四月「入学式」、五月「記念はとの子運動会」、六月「オープン研修会」、十月と十二月の『自立した学習者を育てるⅡ』を研究主題にした公開研究協議会、十一月の「記念はとの子学習発表会」「記念はとの子式典・講演」、三月の「卒業式」と実施され、各場面で子供たちは常に自分の考えを持ち、友達と協力してその考えを広め深めていく場を構築していました。教師は目当てに早く近づけようとしたり先走ってま

めたりせず、じっくり待つ姿勢がありました。

ここ数年、新型コロナウイルス感染やインフルエンザ、加えて予期せぬ水害等が続き、子供たちの生活も不安の連続だったと思います。しかし、それらを乗り越え、落ち着いて意欲的に挑戦している姿が見られました。先生方のご苦労や保護者の皆様の励ましもあつた事でしよう。子供たちは耐える力、挑戦する力で前進しています。

人との出会いや交流、環境や物との出会いが多いほど人は育つといわれます。私が附属小に勤務していた頃、校舎の改修があり、鉱山学部の木造校舎に約五か月間引っ越しした事がありました。校舎周りの木陰でグループでリコーダーを響かせたり、突如教室に飛び込んだきた昆虫に驚いたりした、日々豊かな体験ができたことを懐かしく思い出します。

私たち拾華会会員は現在約三百名ですが、今後も附属小学校の子供たちや先生たちを応援し支援し、同時に会員同士広く深く交流し続けていきたいと願っています。



# 目次

(在籍年順)

|               |        |
|---------------|--------|
| ご挨拶           | 相場 郁子  |
| 要・三大経験        | 佐藤 昭二  |
| 多くを経験した十八年    | 園部 勇   |
| 雑草のように        | 河本 紀人  |
| 音楽とともに        | 船木 ノリ  |
| 心わくわく 附小      | 佐藤 卓男  |
| 自ら可能性をひらいていく… | 伊藤 一   |
| 附小「夢芝居」       | 近藤 久隆  |
| 苦しくも充実した五年間   | 宮川 勉   |
| 何事にも代えがたい経験   | 佐川 喜一  |
| 三十五年前を顧みて     | 伊藤 薫   |
| 楽しかった三年間      | 佐々木 久春 |

|                  |        |
|------------------|--------|
| 附小で掴んだ宝物         | 柴田 彰   |
| 秋大附小「はな」の思い出     | 佐藤 真   |
| 公開研究協議会の思い出      | 濱松 寿   |
| ソニー賞全国最優秀受賞の思い出  | 柴田 文平  |
| 自分は何者かを知る        | 笹山 洋希  |
| 附小時代の思い出         | 山石 祥子  |
| コロナ禍の思い出         | 堀川 修   |
| 附属小学校の思い出        | 三森 洋子  |
| はとの子たちと過ごした日々を思う | 黒沢 淳   |
| 附属小、拾華会の思い出      | 湊 弘一   |
| 附属小での五年間         | 加賀谷 正人 |
| 思い出すこと           | 佐藤 稔   |
| 恵まれた教育環境の中で      | 千葉 圭子  |
| 附属小学校での授業の思い出    | 林 信太郎  |

## 特別座談会収録記録

(進行)

濱田 純  
佐々木 良三  
芳賀 龍平  
大島 博子  
京野 真樹

## 資料 拾華会考

## 編集後記

濱田 純



## 要・三大経験

佐藤 昭二

附属小学校に出勤してみたら、所謂職員室なるものが存在しない。参考書類の私物等は全部教室で処理せよとのこと。そして職員室らしきものは談話室として活用するのであると聞かされる。何年か経ったある日の談話室での一こま。誰が言ったか忘れた。「附属小学校に来たからには次の三つのことを経験しないと一人前とは言えないぞ」とのこと、幸い三つを経験させて貰った。

一つ目は入学テスト問題作成委員になること。午後四時頃からあの狭い校長室で、副校長の監視の下、仕事を始める。作成委員は前日に命じられ必要と思われる物は、前日中に「のてや」から準備しておくこと。数の理解問題の中で推理律の理解程度の問題は毎年出されたようであった。

二つ目は時間割作成委員を経験すること。これには参ってしまった。忘れられない同業者は村井如矢氏であった。彼には難儀をかけた。図書館にあるテーブルを二段重ねにし、私とそのテーブルの上に長い鞭を持つて座り、専科の先生方の行く学級を床に

書いた大きな時間割枠に嵌めて（置いて）いく。

三つ目は合格抽選会の委員になることである。特にキヤップは大変気を使う。副校長も側で見守っている。①抽選の概略を説明する。②白い封筒の中に抽選順の番号札が入っているのを確認して見せ、それを引かせる。③合格者一二〇名分の合格札を確認し封筒に入れる。④先ほど決まった抽選順に並び箱の中から封筒を選び取る。⑤その場で（講堂から出ない）開封する。⑥合格者の発表をする。今はどうなっているだろうか。問題作成中、副校長に呼ばれた。三月の異動で、是非中央事務所に来て貰うからそのつもりでいるとの連絡を受けた。これが附属小との別れであった。

（在職期間 S三十九年四月～S五十年三月）

## 多くを経験した十八年

園部 勇

昭和三十九年四月から、五十七年三月まで附小教官として勤務させていただいた。

その中で、いつも驚きと怖さを感じて見ていたことがあった。

ある日突然に、校内の全教室に新品のオルガンが運び込まれたり、立派な視聴覚室があつという間に完成したりする学校であつたことである。体育館がなくて体育の学習に不自由さを感じた時期があつても、中庭とその周辺の土地は、数日の間にアスファルト化され、校内・外が内ズクのまま行き来できるようになり、急に小体育場、広い遊び場が完成するのである。公立学校では考えられないことがこの学校では、予算が付くと確実に校舎の内・外を問わず、新しく変ぼうした姿を見せてくれるところであつた。ある意味で、すばらしい力を持った学校であつたと振り返ることができる。

また、ある朝の出来事である。一般の方から電話が入り、「国語の先生」にお聞きしたいことがあるので近くにおりませんかという話であつた。偶然にもたった一人いた私に、「今テレビを観ていて、「こんにちは」の『は』ではなく、『わ』ではないか」ということである。

幸いこの『は』の助詞について、表記や

使用については、自信を持って説明できそうだったので、その電話を取り次ぎ、丁寧に答えることができた。

後に、国語主任に報告したら、言葉の使用や表現のしかたの説明で、日本人の使用の歴史に触れ、助詞『は』は、残つて来たものであるから、助詞の『は』の使用は正しく、『わ』は間違いであることが説明できたようであったと思うと言つて下さった。

このようなことが、いつまた来るかわからないので怖い学校だと強く感じた。

(在職期間 S三十九年四月～S五十七年三月)

雑草のように

河本紀人

秋田の教育を支えた男子師範学校の校舎を改築、それを校舎として秋田大学附属小学校が再出発した。黒色の石を積み重ねたような校門を過ぎると、右手に『雑草のように強く たくましく』と刻まれた石柱が目に残る。親や教師が「子供たちを強く育てたい」という願いから建立されたと言

う。左手は、四季折々緑を楽しませる野草園、玄関に入り、上を見上げれば『自律』と印されたプレートが眼に入る。今から四十数年余り前、悲喜こもごも、強く脳裏に映ることを記してみたい。

その一「新入教職員歓迎会」――

「貴様と俺とは同期の桜、同じ附属の庭咲く。咲いた花なら散るのは覚悟、見事散ります附属のために……」、会の冒頭の歌声に強く緊張、心をゆさぶられた。それから勤務が始まり、連日緊張の日々が続いたことを思い出す。

その二「公開授業研究会」――

附属小教師全員が、教科・教科外活動分野を選び、指導計画案を作成し、授業を行い、研究を深めるものである。自分の実践社会科「八郎潟干拓」を取り上げてみたい。学習題は「干拓の工夫と苦労」。湖底の軟弱地盤（ヘドロ）に挑む開拓者の姿を観察し、授業時は、万雷の拍手を贈りたい。試合を振り返るとヘドロを教室に持ち込んで、それに触れながら試行錯誤し、意見を出し合う授業を行い、「土を乾燥させて硬くして仕事をしやすくすればよい」という考えでひ

とまず終了した。その後、干拓道路建設や開拓者の住居建設など進行状況を授業に取り入れた。自己学習も進め、干拓がどのように進むのか、関心をもつよう指導した。ヘドロに挑む干拓者の姿がモニメントになって干拓博物館に展示され、苦勞を偲ばせる。

その三「剣道全国制覇」――

附小健児の少年剣道の二度に渡る全国優勝は、附小の「強く たくましく」の心の支え、万雷の拍手を贈りたい。

試合を振り返ると――

全国から集った二百を超えるチームの中で、一つ一つ勝ちを重ね、優勝戦まで漕ぎ着けた。決勝戦は二対二の大將戦と成り、一進一退を繰り返したが、附小大將の一本ねばり勝ちで試合を制し優勝を得た。剣児たちのガッツポーズは今でも忘れない。

今や、附小健児のみなさんは、時代の「宝」社会を支える中堅としての存在は、ますます重要になることでしょう。附小健児の成長を見守り激励して下さった職員、お父さん、お母さん、ご家族のみなさん有り難うございました。

附小百五十周年のお仕事に携わる方々のご努力に感謝し、遠い過去を愛でながら筆を閉じさせて戴きます。

(在職期間 S四十三年四月～S六十一年三月)

音楽とともに

船 木 ノ リ

「おはようございます」のあいさつと共に、全職員で季節の歌を歌ったことを思い出す。まあい円形の教官室には、事務机はなく、教務手帳を持ってソファアに座り、皆と顔を合わせながら、朝の歌や打ち合わせ、教官会議や研究協議会等が行われた。

季節の歌は全校集会でも歌った。高学年の子どもたちは、低学年のかわいい声を聴きながら笑顔になり、低学年は高学年の幅広い声に合わせようと歌っていた。心のつながりが美しいハーモニーとなつて響き合った。

昭和四十九年の附属小創立百周年記念式典には、東京芸術大学出身で、当時NHKで大活躍中の小野崎孝輔氏の作曲による「記

念賛歌」を歌った。独特の曲想をもつ伴奏形に戸惑ったが、式典の前練習で、ステージに立たれた小野崎先生の美しい姿と、わいてくる音楽性にうっとりしながらピアノ伴奏を受け持った。全校の子どもたちの歌声が、練習回数を重ねるにつれ、体育館いっぱいに響きわたり、感動でいっぱいになった。

同年七月には、全日音研小・中学校部会全国大会が日新小学校と県民会館を会場に行われた。附属小勤務三年目、二年生の子どもたちを引き連れて授業を展開。「創造性の開発をめざす音楽教育」をテーマに実施。歌声を響かせながら輪唱していく子どもたちの笑顔が今でも思い出す。全国の先生たちが集まった全体会での「大会歌」。そのピアノ伴奏を受け持ち、慌ただしい一日となった。

同年五月には、研究図書『学習する能力を育てる指導』の出版もあった。パソコンのない時代、納得するまで鉛筆で書いては消しの連続。一行仕上げるのに何日もかかることがあった。みんな懐かしい思い出である。

今、拾華会の懇親会の折に皆さんで歌われる「拾華会の歌」。大友康二氏の味わい深い詩と、大守崇男氏の美しいメロデーに心をよせて歌っておられる心地好さをかみしめ、指揮棒を振らせていただいている。

(在籍期間 S四十七年四月～S五十二年三月)

心わくわく 附小

佐 藤 卓 男

校門の「百十周年」の看板、胸をドキドキさせ、校舎に入る。附小の役割は『公開研究会』・『教育実習』・『普通教育』である事を確認させられた。

担任は4C、時間割は委員会で決定の説明で、組織の相違に驚かされた。

授業は五学級で児童数二百名であり、名前も覚えきれない状態である。自学級の時間は、十時間だけ。六月は二日間の公開であり、ますます不安がつつた。諸準備で帰宅は十二時過ぎも時々あり、とにかく大変な二ヶ月だった。

先輩の助言は、『あつ！と驚く大胆な提示

が理科では大切だ』である。教材教具作りは、自作で大規模、誤差の無い仕上げに苦勞した。公開後の拾華会までは、悩み焦りの連続であったが、「やっと附小の一員になった。」の想いで胸一杯になった。

年二回の教育実習は八人が配置された。

実習ノートの記入等で、更に多忙になるが、自己を振り返る機会にもなった。

百十周年の学習発表会は、各学級で実施。指導時間も無い状況で心配したが、発表内容が素晴らしく、「さすが附小の子ども」と感銘した。

保護者の協力や教師の情熱。備品整備に配慮する事務室。管理職の適切な指導で学校教育が充実・発展する事が再認識された。

特別な体験として、大学での講話と東北大会の授業が心に残る。問題を発見し自ら求め続ける力の育成を主眼に事象提示を提案した。(水と温度の学習で大規模自作教材の活用) 附小での五年間は、失敗の連続で迷惑の掛け続けであったが、貴重な財産にもなった。何事にも、心にゆとりを持つ事が、教師・人間として生きる根本である事を学んだ。

思い出いつぱいの附小。

“ ありがとう 附属小学校 ”

(在職期間 S五十七年四月～S六十二年三月)

自ら可能性をひらいていく…

伊藤 一

自ら可能性をひらいていく子どもを育成するために―これは、私が附属小学校在職中の研究主題でした。それを受けて、国語教師である私は、個に学びが成立することを目指して単元学習の実践に取り組んでいました。当時、まだ駆け出しの私にとって、単元学習の理念を理解し、具体化するの骨の折れることで、構想案をもとに、資料を探し求め格闘したことが今も鮮明に思い出されます。

そんな中、大村はま先生に授業を見ていただく機会を得ました。提示したのは「ことわざ発見」という単元の、子どもたちが手引きを頼りに辞書を繰り、自分に合ったことわざを見つけて文章に表すという場面だったと思います。山場のない授業を提示してしまっただけ、はらはらしていましたが、

大村先生は、最後までじつと子どもたちの様子をご覧になっていました。授業後の研究会の助言の中でいただいた「子どもが書き浸っていることがよい。」という言葉は、私の宝物になりました。そして、大村先生を玄関まで見送りしたときの一言…「先生、やめないでくださいね。」この言葉の真意は未だにわかりませんが、若輩の自分に言葉をかけていただいたことがうれしく、生涯国語教師として単元学習を実践し、学び続けようと決めたのでした。

附属小学校在職中は、昼夜を問わず、とにかく授業づくりに夢中で取り組む毎日でした。思い通りにいかないことや失敗もたくさんありました。しんどかったのだけれど、振り返ると何故か楽しいのです。校内には、志を同じくし、日夜研究に励む先生方がいました。どの先生からも、学ぶことがたくさんありました。また、先述したような挑戦する機会が幾度もありました。いつの間にか、私の方が自ら可能性をひらいていくためのきっかけをもらっていたのかもしれません。

(在職期間 S六十二年四月～H三年三月)

附小「夢芝居」

近藤 久隆

昭和六十二年四月、図工美術の先輩方に導かれるように附小に入った。その足で大学に赴き宣誓書を読み上げた。その時、「遵守」を読み間違えたのが、私の夢芝居のスタートだった。六月は公開研。一日目が教科で二日目は道徳・特活。終わるとバスに乗って職員旅行という凄まじさだ。附小の研究テーマは「自ら学ぶ子どもの育成」だった。どうアプローチすればいいのか皆目見当の付きかねていた私に、校長（湊三郎教授）が一冊の本を貸してくれた。「学びの構造」（佐伯胖著）である。この本で対象へのアプローチを学んだ。この後私は、答えは常に自分の中にあるとの思いから「学びの過程」を作成した。S副校長に、「これはどのようにして作成したの」と問われた時、生意気にも私は自分の頭を差して見せた。佐伯胖先生の夏期講習が有るといので、S先生と二人で明治大学に行ったことがある。たいした収穫もなかったが、宿泊したホテルでのS先生の軒の凄まじさだけに心に残った。生涯学習が叫ばれ、生活科が賑わ

う流れの中で、新たな教育を模索していた私は、教育課程の中にフリー学習の時間を提案した。子ども達の経験知の拡大を意図したもので、全県を小班に分け地域学習を行った。これが後の修学旅行先でのグループ学習に繋がった。今では考えられない事だが、普通時でも帰宅は午後九時頃。公開研に向けての看板や案内板、さらには要項や資料の作成で、当日の二時まで準備した事があった。当然、授業は大失敗。戸惑い顔の子ども達の姿が今も目に浮かぶ。いつだったか公開研のすぐ後に、文科省の指定が突然舞い込みそのチーフになった。否、ならせられた。夏の暑い盛り、いつもだと会議は（今は無い）泰山荘なのだが、この日は秋田温泉だった。始めの内はともかく、飲酒が入っていきなくなった。最終的に創り上げた資料は、B4版で三センチ程の分厚さにもなったが、あの日あの時、何も決まらず困り果てた私は田んぼからの蛙の合唱に囲まれていた。H先生が教育事務所勤務の辞令を受けた時の事だ。どうやら面接で「私を一介の指導主事にするつもりか」と啖呵を切ってきたらしい。これが効いた

のか地方の教育事務所長になった。附小プライド。附小と指導主事が張り合っていた昔の事である。附小のテーマ「自ら学ぶ」を補強する意図で「学び方」を取り入れようとしたことがあった。招いたのは柴田義松先生（東京大学）で、講師依頼のために赤門をくぐった。「子どもが魚を求めた時、魚を与えず釣り方を学ばせる」といった分かり易い論旨ではあったが、そのための具体的なアプローチが曖昧で説得力を欠いた。今にして思えば受け取る側の私達の力量不足が原因だったのだろう。柴田先生に大変に失礼な事をしたと思う。勤務六年目の事だった。北尾倫彦先生（大阪教育大）が附小の視察に来校された。私も授業を参観していただき、その後先生から、図画工作科の原稿依頼があった。テーマは「指導と評価」（ぶんきょう出版）B4版14ページ程の小論文で、各領域の先生方との合同執筆だった。大変な苦勞もしたし、いいお小遣いになると期待したが、全く売れなかったらしく、後に五千円頂戴した。附小にはお祭りがあった。教室は勿論、体育館とグラウンドを使用しての子ども達の祭だ。この

パフォーマンスの舞台作りに数十本の灯籠を創り校舎の周囲に立てた。ゴムボールに鏡の破片を貼り付けたミラーボールも作った。各学年ごとに幾日もかけて作った子ども達と先生の力作でグラウンドに溢れかえっていた。思い起こせば数え切れない程の大小のエピソードに溢れまみれた六年間。私はここで初めて教師になれた気がする。附小という名の夢舞台で教師を演じ続けた六年間はとても幸せな時間だった。(在職期間 S六十二年四月〜H四年三月)

## 苦しくも充実した五年間

宮川 勉

大卒初任で二年間複式学校に勤務した後、三年目に附属小学校に赴任したということもあり本当に大変な毎日でした。初日から想像を遙かに超えた勤務となり、日をまたいで帰る状況や公開に向けた話合いでの激しいやり取りに圧倒されました。自分なりの考えを常に問われ、その都度、厳しく熱のこもった指導を先輩方からしていただき

ました。教師としての姿勢をゼロからたたき込まれた、大変でしたがとても充実した毎日でした。

五年間の中で一番に思い出されるのは、直前の日曜日に結婚式を挙げたこともあり、赴任した年の公開研究協議会です。公開前に私の体育の授業を見に来た副校長先生からの「子どもは活動はしていたが、これでは授業とは言えない」とのストレートな言葉に、公開までになんとかしなければと必死に授業を練り直しました。公開後「とりあえず授業にはなっていたな」と言われた時に、本当にほっとしたことは今でも鮮明に覚えています。

他にも、授業構想が固まらず、夜中に体育館にマットを並べて悩んでいる時に相談ののってもらったり、道徳の校内授業研究会では「学級経営がなっていないから話合いににならない」と言われたりと……。とにかくパワフルで、個性的な先生方の厳しい叱咤激励とその奥底にある温かさを感じる毎日でした。また、忙しい中にあっても山菜採りや泊まりがけでスキーに行くなど、研究以外でも多くの経験をさせていただきました

した。

正直、自分のような者が附属小学校にと何度も思いました。しかし、教師としての核になるようなものを身に付けることができた、苦しくも充実していた貴重な五年間だったことに間違いありません。すばらしい諸先輩方と一緒に、楽しく過ごせたことに感謝しています。

(在職期間 S六十二年四月〜H四年三月)

## 何事にも代えがたい経験

佐川 喜一

教頭時代のある日、不意の訪問者があつた。「Aさんと結婚することになり、結婚披露宴で紹介したい映像を秘密で制作したいので、Aさんの母校に来ました。」

Aさんを低学年で担任し、もう二十五年くらい経っている。校舎は移転し、今あるのは旧校舎の航空写真、卒業アルバム、学校文集「いちよう」くらいか。その時、旧校舎から記念に持ってきた物がいくつかあったことを思い出した。旧校舎の古いコン

クリート製の柱、正面玄関のオブジェはどれも素晴らしい物であるが、子どもたちにとってはインパクトが薄い。そうだ、旧体育館ステージ正面上にあった「飛び立つ鳩の壁画」が音楽室の前にある。そこで、壁画の写真を撮り使ってもらうことにした。体育館で活動する子どもたちを見守り続けてくれた壁画はAさんにとっても思い出深い物のはずである。結婚後夫婦での再訪を受け、小学校当時の思い出話に花を咲かせた。

Aさんの来訪は、自らも思い出に浸る時間であった。

生活科では、ヤギやウサギ等を飼育。ウサギを抱え滑り台を滑る子どもの姿に驚きもした。自分で判断して必要な物を買う経験が少なかった実態から、文房具屋Nさんのご協力で仮想文具店を作り、実際の買い物を体験させた。ダイナミックな活動を展開しようと考え、手作りの竿燈を体育館であげた。算数科では、「学ぶ楽しさ」のできる喜び」を追究した単元開発の数々。タンogramやオリジナルのジオボードを使った単元では活動に没頭する子どもたちの姿が思

い出される。その他、附小祭りや縦割りグループ活動。今思えば、生き方教育やキャリア教育そのもの。子どもの可能性をひらくためのものだったと思う。

どんな時でも真剣に取り組んだ先輩や同僚との日々は何事にも代えがたい経験の連続でした。感謝の気持ちでいっぱいです。二月の入学時説明会、担任だった子どもが親として来校した時は、当時を思い返す懐かしい時間であった。

（在職期間 S六十二年四月～H十一年三月、  
H二十七年四月～H三十年三月）

三十五年前を顧みて

伊藤 薫

私が教職に就いた頃の世界では、附属学校は「地域における教育の応用的・技術的しかし戦後の教育改革によって、前述した研究をはじめ、指導的な役割」を果たしていた。しかし戦後の教育改革によって、公私立学校の教育水準が向上しつつあること

や教員免許状取得希望者の増大で、附属学校の運営に大きな変化が見られるようになった。こうした時代の流れの中で、附属学校をどう受け止め、本来の使命をどう具現化するか大きな課題であったと同時に、管理職としての職責を果たせるか私にとって不安もあったが、当時の教職員はよくまとまり、暖かい人間関係ができていたことから、何事があっても迅速に対応できたことに感謝している。一方、短期間でしたが、一年目は湊三郎校長、二年目は佐々木久春校長との出会いができたことで、その後の管理職としての「ノウハウ」を数多く学ぶことができました。

さて、私は昨年卒寿を迎えたが、今でも脳裏を去来することの第一は「附属教育を語る県教委との教育懇談会」の設置である。当時文部省から強く指示されたことは「国公立校との人事交流を積極的に実施せよ」でした。そのためには県教委の附属に対する理解と協力がなければ、不可能と考えたからである。第二は「春公開を秋公開に変えたこと」である。これまでの学習活動は教師主導型でしたが子供主体の活動にす

るには、どうしても個性の理解が必要だが四月転入教員にとつて、子供理解に時間が必要であろうとの配慮でしたが、拾華会幹部からの許可を得るのに大変苦労したことです。最後は、教育実習を地方分散方式に変更したこと。理由は指導教官一人に十数名の教生が配属されていたことや指導教官が年々若年化されたことを考慮しての対応でした。（在職期間 H元年四月～H三年三月）

## 楽しかった三年間

佐々木 久春

平成二年から平成五年までのことだから、三十年ほど昔のことになる。附属小の併任校長として秋田大学勤務晩年の三年間を過ごした。週一回、大学で講義も会議も無い日の七時半過ぎ、車を駐車場に置いて附属小の朝の全校集会に出ることにしていた。朝の道を正面玄関へと歩いて行く。と頭上から天使の声 かと思われる声が降ってくる。「コウチョウ センセ！オハヨウゴザイマス」という高く美しい声である。声のす

る窓の方を振り仰ぎながら窓下の花壇沿いに歩んで行く陶酔の一時であった。子どもらを前にして無味な話もどうかと思い、毎週自作の詩を披露した。

ありがとうみんなみんな ありがとう  
きみはわたしに わたしはきみに  
あなたはみんなに ありがとう  
ひとは見えない糸で 結ばれているんだ  
お父さん お母さん チャオとチャム  
まだ名前のないチャオの子 うさぎたち  
とりたち 風も草も木も ありがとう  
日本はいま朝 フランスはまよなか  
ボストンもロンドンも夜  
でも見えない糸で むばれている  
だから世界中にありがとう

（「みんなでありがとう集会」で、  
チャオとチャムは動物舎の山羊たち）

詩は『光と水と風の音』として二十二篇を一冊にまとめて全校の子どもたちにお別れのとき贈ってきた。

やがてあなたもあの子も走り出す 止まれ  
走るな 走りながら微笑むことはできない

立ち止まれば ほら足もとに小さな花も咲いている 頬にそっと触れていく風と話をすることもできる。（「PTAだより」に）

楽しい三年間だった。

（在職期間 H二年四月～H五年三月）

## 附小で掴んだ宝物

柴田 彰

平成四年の公開研、前夜遅く体育館で研究説明のリハーサルに、付き添ってくれた仲間がいた。OHPとスライド操作の補助役で、研究委員の肩書をもった同僚だ。（装置がでとプロジェクトに換わった最後の年かと思う）数週間前には、学校近くの旅館『秋月』に宿泊し、会の運営確認や、参観者への配布物の点検作業をやった。結束力は固く、『個の仕事より全体の作業が優先』が、暗黙の了解で徹底されている頼もしい仲間だった。所属の理科研究室で、芳賀主任から授業づくり・研究の中味、附小教師の心構えなどを指導いただいた。「何でも吸収し

て、学んでいった方がいいよ。」のアドバイスも……。

赴任一年目から、学担と学年主任、理科と道徳の研究、研究委員の役職も兼任した。市研究会と連携していて、東北道徳研の授業者にも借り出された。理科事務局も務めた。三十代後半の年齢だったので、肉体的には持ちこたえられたが、精神的にはかなり重圧を感じていた。日々十二時間以上働けたのは、家族と別居の単身アパート暮らしだったから。

激務の中でも、他附属の公開研や伝達講習会等に参加出来たのは嬉しかった。研修の機会を得られたし、気分転換にもなったからだ。校内授業研は公開研より緊張した。大御所等の鋭い指摘や意見を理解できず、悶々としたこともあった。質疑応答の議論が噛み合うようになった頃には、度胸もついていた。

格調高い儀式や行事も多く、経験し企画力も磨かれた。先輩諸氏が熱く語る教育論を拝聴できた飲み会も多く、疑問が解決したり、自信づけられたり、発奮させられたりもした。

附小で培った素養や出会いは、大きな宝物だった。その後の教職・市教委勤務で、指標の参考となったし、困難に立ち向う推進力にもなってくれた。『宝物に感謝』は今でも。  
(在職期間 H元年四月～H五年三月)

#### 秋大附小「はな」の思い出

佐藤 真

春が来れば、思い出す。

保戸野学園通りの桜並木、図工室前の薔薇のアーチ、職員室窓下のチューリップ、児童玄関前のベコニア。千秋公園の夜桜の灯りを眺めながら、六月の公開研究会前の指導案書き。赤・青・黄色の旗がたなびく運動会、嬉しい、悔しい、子どもたちの美しい顔。

夏が来れば、思い出す。

千秋トンネルを過ぎると目の前いっぱいの新緑。低学年棟の可愛い朝顔の鉢。夜遅くまで附小祭りの準備の毎日。龍の頭が体育館に入らず、笑った、哭いた、子どもたちの美しい顔。

秋が来れば、思い出す。

遠くに見える太平山の紅葉。なべっこ遠足で聞かれて、答えられなかった萩の花。地区記録会とフリー学習が夢に出てくる毎日。「夜にこっそり枕投げをしました」と聞いた会津への修学旅行、しなやかで、逞しい、子どもたちの美しい顔。

冬が来れば、思い出す。

夜の校舎見廻りで見た、あるクラス担任の先生用机のポインセチア。夜遅く帰る時の車のフロントガラスの雪の華。スキー教室で太平山や田沢湖高原へ、学校とは違う友達同士や親子での、心強い、微笑ましい、子どもたちの美しい顔。

いつの季節にも、附属小には子どもたちの美しい顔があったことを、思い出す。あのような美しい顔を見せてくれた附属小の子どもたちには感謝しかない。百二十五年以上もの間、そのような美しい顔を「華」とし、その「華」を「拾」うために「会」した、これまでの素晴らしい教職員の方々にも、感謝である。日本一の学校。秋田大附小、万歳！

(在職期間 H二年四月～H十二年三月)

## 公開研究協議会の思い出

濱 松 寿

私は、附属小学校に一二年間お世話になりました。この間、職名が「文部教官教諭」「文部科学教官教諭」「教育系職員」とになりました。教育学部をとりまく環境が大きく変化した時期でもありました。研究も教科・領域等中心から学校づくりへとシフトした時期でもありました。

一年目、認識過程に衝撃を受けました。子どもの内面にアプローチした授業づくりは、目から鱗でした。以後、研究内容は変わっても、私の授業づくりの根底には、認識過程がありました。

私は、平成十一・十二年度の二年間、研究委員長を務めました。一年目は、教科と総合のつながりを中心に。二年目は、総合の中心に表現活動を据えて教科とのつながりを一層強化し「表現と学力の学校」づくりに取り組んだことを懐かしく思い出します。

二年目は、公開研の持ち方も大きく変わりました。教科別の分科会から低中高学年協議会となり、全国的に著名な指導者から

ご指導いただきました。一日目は、シンポジウム、二日目は、中野重人先生と嶋野道弘先生のご講演、さらに食農教育も新たに総合の分野として加わるなど、研究委員長二年目は、初めての事ばかりで、右往左往しながらの運営となりましたが、当時の濱田副校長先生の強力なリーダーシップと教育の未来を見通したご指導に支えていただきました。

子どもとともにつくる動的な教育課程によつて、これまでの教科・領域等の研究成果がより深まり、特色ある学校づくりに結び付くことを実感しました。

附小で学んだ授業づくり、学校づくりの実践研究は、私にとって附小で得た大きな財産です。お世話になった皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

（在職期間 H四年四月～H十六年三月）



## ソニー賞全国最優秀賞受賞の思い出 柴 田 文 平

厳しい研究環境のもと、充実した六年間を過ごさせていただきました。日々の教育、研究のほか、この在任期間には、校舎が旧校舎から新校舎に移転するという時期だったこともあり、校舎（理科室等）の設計や提案書作成に関わり、貴重な経験ができました。本稿では特に印象に深く残っている思い出を書かせていただくことにします。

平成八年九月二十六日（金）、突然校長室に一本の電話が入りました。電話の相手はソニー教育振興財団事務局の内田氏からで、「十月一日の午前中に、貴校を視察させてほしい。」とのこと。「何人でおいでですか。」と芳賀龍平副校長先生がお尋ねしたら「四人で視察したい。」第四十一回ソニー教育資金課題論文が全国最優秀賞に内定した瞬間でした。横山智也校長先生、芳賀龍平副校長先生と「やったー」と握手をさせていただきました。

視察当日、四名の審査委員が最終審査のため来校しましたが、この中には、財団専務理事の島津久永氏（元皇族貴子様の夫）

も来校され、芳賀副校長先生は、大変感激されていました。「私が選んだ旦那様を見てください。」の名台詞で、昭和四十年代に、島津ご夫妻の結婚発表報道が日本国内で大きな話題になっていたからです。

執筆作業は、課題論文（以下論文）の執筆と実践資料の作成を私が担当し、高橋健一先生が理科と社会の合科的なフリー学習の実践事例を執筆しました。論文はある程度早めに完成できたのですが、ちょうどこの頃、校内がO157対応でゴタゴタするというハプニングが起きてしまい、添付する資料作りに大変手間取っていました。締め切り日前夜は、初めて自宅に帰らず徹夜して、提出に間に合わせました。

視察当日には、授業提示が求められていたため、池田裕先生に二年生の生活科の授業提示をお願いし、快諾をいただきました。

論文の課題は、「人間のもつ可能性の開發をめざす教育」。求められた課題について自己教育力の育成を認知的な側面に焦点を当てた自己評価能力、自己効力感、自己有用感に基づく理科・生活科・総合的な学習等の単元開発の継続的な研究実践をまとめた

ものでした。特に「有用感」という教育用語は、この当時国内の教育界では、ほとんど認知されていませんでしたが、秋大附属小からの提唱で、今日では広く学校現場に認められ、普及・定着しています。

十一月十五日にソニー本社で行われた贈呈式では、この頃、私が文科省主催の海外事情視察出張中だったため、高橋健一先生に本校を代表して研究実践の発表をお願いしました。選考委員代表の島津久永氏は、本校の論文を「最近の教育・授業手法をあまねく研究し、その中から自校の、その子どもたちに必要な手法を取り合わせて採り入れ、更に独特の工夫を加えて、毎年、順序を追って成果を挙げ、更に改善する、やる気に満ち溢れた学校である。」と審査経過を紹介しています。筑波大附属小、福島大附属小等、全国から二百十八校の応募の中から、本校の研究実践を客観的に全国最優秀であると認定してくれたのです。

ソニー財団からの賞金二百万円と副賞の最新の教育機器は、いったん大学に納付され、その後全てを附属小学校の情報教育充実に活用させてもらいました。

応募した論文はたくさんの方々の皆様の附属小教育への熱い思いが凝縮されたものでした。

フリー学習を附属小で初めて提唱、導入してくださった先輩の方々、また、この当時の研究主題「豊かな子ども文化を開く学校」、副主題「子どもが有用感をもつ単元開発」を提唱してくれた佐藤真先生、佐川喜一先生、さらに論文を何度も校正、点検してくださった横山校長先生、芳賀副校長先生、佐藤敬子先生、児童用にアップルコンピュータ四十二台をいち早く附属小に導入して情報教育をリードしてくれた佐々木靖治先生、理科部と一緒に研究を進めた阿部英子先生、佐々木由紀子先生には、改めて心より感謝申し上げます。

（在職期間 H五年四月～H十一年三月）





受賞論文収録に収められた論文の冒頭部分  
懐かしい旧校舎が写っています。

贈呈式後のレセプション会場で  
岩間英太郎審査委員 木原信敏ソニー代表

|   |                                                                                                         |                                                                                |            |
|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|------------|
| 1 | 受賞記録                                                                                                    | 第21回 優秀賞受賞                                                                     | 第32回 優秀賞受賞 |
|   |                                                                                                         | 第41回 全国最優秀賞受賞                                                                  | 計3回受賞      |
| 2 | 現地最終審査訪問                                                                                                |                                                                                |            |
|   | 平成8年9月26日 午前8時30分から                                                                                     |                                                                                |            |
|   | 来校者 ソニー本社島津久永氏他、山崎、黒崎、内山氏の計4名                                                                           |                                                                                |            |
| 3 | 正式な受賞通知日                                                                                                | 平成8年10月26日(金)                                                                  |            |
| 4 | 授賞式                                                                                                     | 平成8年11月15日                                                                     | 会場 ソニー本社   |
| 5 | 授賞式出席者                                                                                                  |                                                                                |            |
|   | 横山智也校長先生、芳賀龍平副校長先生、佐々木茂美PTA会長、<br>高橋健一先生(研究実践の概要を講演)                                                    |                                                                                |            |
| 6 | 新聞報道                                                                                                    | 読売新聞全国版・県内版 秋田魁新報が長年の自己教育力に<br>基づく理科学習、「総合的な学習」に関連するフリー学習の研究実践が<br>高く評価されたと掲載。 |            |
| 7 | これまでに、県内でソニー賞応募論文で全国最優秀受賞校は、受賞順に<br>山王中、横手南中、秋田大附属小となっている。小学校での受賞は附属小<br>が、初めてで秋田県教育界にとっても快挙となり、話題となった。 |                                                                                |            |

自分は何者かを知る

笹山洋希

附属小学校には実に九年間お世話になりました。地元に戻ってからは、中学校で部活動の指導に熱中したり、教育委員会で行政に携わり学校訪問に勤しんだり。管理職に就いてからは、学校事務に忙殺されたあげく、さもない学校経営をして役職定年を迎えました。授業づくりで没頭した附小の頃とは異なる仕事ばかりで過ぎた二十五年。自分は何を志して教職に携わっているのか、自分は教育の世界において何者なのか自問自答しながら、自分探しの旅をしてきたような気がします。

定年延長初年度の正式な定年退職をした昨年度は、一教諭として中学校で社会科の授業を生業とする日々が戻ってきました。自分が日常的に授業をしなくなってから急速に進展したICT化とタブレット、電子黒板の扱いに翻弄されながら、この歳で必死に教材研究や授業準備に取り組む毎日、さすがに楽ではありませんでしたが、そんな中で思い起こしたことがあります。それは、附小で最初にお世話になった副校長塩

澤清先生の教えです。社会科の名伯楽であ

った塩澤先生は、「授業では、子どもたちの

『はらわた』を『むんず』と驚掴みにし、

子どもが自ら答えを出すまで決して離さな

いこと」と話しておられました。この迫力

ある言葉には、授業は子どもの内面の変革

を成すものであり、教師の子どもに対する

関わりは絵空事ではない、教師と子どもの

魂のやりとりであるという信念が込められ

ていたと思います。たかが、授業手段とし

てのICTごときに憂鬱になっていた自分

がふと恥ずかしくなりました。

今後も教職に携わっている自分である限

りは、附小ですでに教わったはずの「自分

は何者か」から目をそらさないようにした

いと思っています。どこをどう切つても、

自分は子どもと共に在る授業者であること

から。

(在職期間 H六年四月～H十五年三月)



## 附小時代の思い出

山石祥子

附属小学校には、教員として十二年間お

世話になりました。そしてその間、拾華会

は、毎年「第一会館」を会場に開催されま

した。年に一度、近況を報告し合う年賀状

のような役割に加え、顔を合わせられる喜

びと安心が感じられる会でした。

はじめは家庭科専科として赴任しました。

専門とは言え、家庭科指導の経験が少ない

状況での公開授業でしたが、研究委員、大

学の恩師、附中の先生など、多くの支えの

中での公開でした。拾華会の先生方にも、

教科の枠を超えて応援していただき、ほっ

として終えたことを覚えています。学級で

も学年でも、やってみたいと思うことに取

り組める自由があり、新しいことに挑戦す

ることも可能でした。明るく好奇心旺盛な

子どもたちにも助けられ、充実した日々を

送ることができました。

校舎の新築も大きな出来事でした。旧校

舎での「附小まつり」は、縦割り班で龍の

張りぼてを掲げて練り歩いたり、グラウン

ドに建てた櫓で盛り上がったたりする姿が印

象的で、初めての体験でした。また、校舎

とのお別れの会では、「はとの子」にちなみ、

体育館中に光るハトをめぐらしましたが、

これも一大イベントでした。活動の一つ一

つに、全精力を傾ける教師集団の中にいら

れたことが、たくさん思い出の核にあり

ます。新校舎への引越にあたり、龍の

骨組みも大量の資料や教材も、旧校舎に置

いたまま出ることになりましたが、外観が

変わっても、根底に流れる先生方の思いや

願いは、変わらずに続いていくものがある

と思っています。

在職中に保護者の立場にもなり、その期

間を含めて十八年間も通った附小は、母校

のような存在です。体験したこと全てが

かけがえのない宝物で、大変だった出来事

も笑って振り返られる幸せを感じています。

感謝。

(在職期間 H七年四月～H十九年三月)



## コロナ禍の思い出

堀川 修

拾華会百二十五周年記念誌の発行、誠におめでとうございます。長きにわたり附属小学校を支えてこられた拾華会の皆様に、心より敬意を表します。

私は、平成九年度から教諭として五年間、平成三十年度から教頭として三年間、令和三年度は副校長として一年間、通算九年間お世話になりました。教諭、教頭、副校長という異なる立場で附属小学校に携われたことは、私にとってかけがえのない経験です。最後の二年間は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行という未曾有の事態に直面した激動の日々でした。秋田大学は、日本でも有数の厳しいコロナ対応をとり、附属小学校もその影響を大きく受けました。教育活動は制約を受け、これまで当たり前に行ってきたことが次々と制限されていききました。

附属小学校の要とも言える公開研究協議会も、大人数が集まること自体がリスクとみなされ、令和二年度は中止となりました。翌年にはオンラインで開催したものの、ま

さに試行錯誤の連続でした。

教育の不易と変化への対応について深く考察する機会を得たことは、私にとって大きな学びとなりました。例えば、オンライン授業の導入は、ICT活用という新しい教育手法を浸透させる契機となりました。それと同時に、対面で子どもたちと触れ合うことの大切さ、学びの共同体の重要性を改めて認識する機会となりました。今振り返れば、制約が多い中で、いかにして教育の可能性を最大限に引き出すか、まさに発想の転換を迫られるクリエイティブな仕事をした貴重な体験でした。決して戻りたいとは思いませんが、人として成長させていただいたと思っています。

末筆ではございますが、附属小学校の益々の発展と、拾華会の皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

(在職期間

H九年四月～H十四年三月、

H三十年四月～R五年三月)



## 附属小学校の思い出

三 森 洋 子

附属小学校には四年間お世話になりました。転入した平成十三年度。教育界では「不登校の児童・生徒が十三万人を超えた。」などの報道があったり、学力論争も盛んになってきたりしていた頃でした。

在職時代を振り返ってみて、真っ先に思い出されるのが、六月と二月の公開研究協議会と、それに向けての授業研究・授業実践です。

『表現と学力の学校』を標榜し全教職員が丸となって授業力向上に努めていました。「目標に向かって実践し、見えた課題を整理しては、次なる目標に向かってさらに実践を積み重ねる。」この連続でした。研究協力者の大学の先生たちや外部講師の先生方からの指導、助言を受けて授業研究会や研修会を重ねました。附属小学校には、学ぼうとする教師が学べる環境がありました。

二月の公開研究協議会Ⅱが終わっても教師の学びは続きました。成長し続ける教師の姿はそのまま子供たちの成長となって表れ、学校が成長していく姿にもなってい

ました。

今振り返っても「あのエネルギーはどこからきていたんだろう。」と思います。

学校創立百三十周年に立ち会えたことも忘れられない思い出の一つです。

周年記念事業にかかわつての式典や講演、はとの子運動会・はとの子発表会は特に印象深く、子供たちや教職員の様子が今でも目に浮かびます。

縁あつて、教職時代の一時期を活力ある底抜けに明るい先生たちと過ごせたことは貴重な時間でした。私も育てていただき、鍛えていただきました。感謝しかありません。

附属小学校の学び舎を去り、次の職場に赴いたかつての同僚たち、拾華会の会員たちがその地域ですばらしい教育実践の花を咲かせていることに触れるたび嬉しくなっています。

(在職期間 H十三年四月～H十七年三月)



はとの子たちと過ごした日々を思う

黒 沢 淳

烏骨鶏、ヤギ、ウサギ、アイガモ・・・

私が在職中に附属小で飼育していた動物たちです。今では、様々な事情から生き物を飼育する学校は、めったに見られなくなっているようです。当時は、生活科や総合的な学習の時間に様々な取組をしており、これらの動物たちは低学年広場などで、思いっきりのびのびといきまませんでした、はとの子たちに愛され育っていました。

二年生を担任していた時、稲作に取り組みました。子どもの一人が、家族の知人からアイガモを譲ってもらい、水田の雑草取りをしてもらおうということで、二羽を学校で飼育することとなりました。子どもたちは大喜びで、毎日かわるがわる世話をしました。

しかし、その幸せな日々も長くは続きませんでした。ある日のこと、(おそらくはイタチであつただろう)野生の動物に食べられてしまったのです。子どもたちは大泣きし、悲しみにくれていました。私も子どもたちと一緒に悲しみ、もっと安全に育てられな

かったのかと悔やみました。

それでも、子どもたちはお墓をつくり、弔い、現実を受け止めていきました。そのころからだと思うのですが、ウサギとのふれあいにも変化が見られたように感じました。自分本位のかわいがり方から、生き物に対し相手意識をもちながら関わる子どもが増えていったのです。悲しい出来事でしたが、子どもたちはアイガモの命と向き合うことで、多くを学んでいたのです。

今の時代は、画面で視聴することが多くなり、五感で感じる力が弱くなっているように思うことがよくあります。あの頃のはとの子のようにリアルを感じ、受け止め、学んでいけることを大切にしたいと改めて思います。

(在職期間 H十三年四月～H十八年三月)

附属小、拾華会の思い出

湊 弘一

赴任当時、一回目の公開研究会の翌日は附中の公開研究会。その翌日が、拾華会の総会と懇親会。第一会館で、退職・現職の

先輩会員の皆様と、緊張しながら会食したことが思い出されます。同年度二回目の公開研究会は冬に行われ、拾華会はなかったのですが、授業後には、国語の大先輩の柏木勇夫先生から「君は説明文が好きなのか、研究したいのか」「話すときに癖があるから直した方がいい」などと細かく丁寧に教えていただいたことを思い出します。

全国大会や県大会の実践発表者に推薦されたときも、国語の大先輩の先生が研究室に来て相談・助言に乗ってください、私の気持ちを汲み取りながら、子どもたちに力をつけるためにはどうすればよいか、単元づくりから指導者としての心構えまで丁寧に教えていただきました。附属小の同僚や秋田大学や研究協力してくださるたくさんの方から貴重な助言をたくさんいただきました。学び高められる環境に自分がいること、教材研究が楽しかったことが思い出されます。本当に鍛えていただきました。ありがとうございます。

拾華会の事務局をすることになった四月。拾華会理事会があり、もろもろの準備に焦りながら必死になっていたことを思い出し

ます。理事会では、子どもたちのため、秋田県教育の質の向上のために日々努力している現職の先生方をねぎらい、いたわり、少しでも力になれたらと願う皆様の思いをひしひしと感じました。

事務局として携わることで、「拾華会」の名称や歴史、「拾華会の歌」（録音テープの歌声）のこと、その時代時代での公開研究会に向けた授業づくりへの熱い思い等々、たくさんの方のエピソード、教育者としてのプライド、教育愛を、より深く広く感じることができたと思っております。先輩たちの話を聞くと、自分の小ささを感じ、もつと力を付けなければ、自分らしさを大事に、ということも考えさせられました。

温かく情熱溢れる会員の皆様との出会いに感謝し、会員の皆様のご健康とご多幸を祈っております。

（在職期間 H十四年四月～H二十七年三月）



附属小での五年間

加賀谷 正人

拾華会創立百二十五周年、誠におめでとうございます。この度、記念誌への原稿執筆の依頼を受け、丁度教職を退職するこの時期に、附属小で勤務した平成十五年からの五年間を思い起こすよい機会となりました。皆さんも同様と思いますが、突然告げられた附属小への異動、男鹿市在住の私に、周囲の先輩方からは、「アパート借りたか？」と心配する声を多数いただきました。五年間、どうにか乗り切れたのも、同僚の皆さんのおかげと、今さらながら感謝しております。

附属小では、理科専科となり、学級担任は経験できませんでしたが、赴任二年目の後期半年間、附属中との兼務発令を受け、短い期間でしたが、附属中での勤務の機会を与えていただきました。朝、小学校に出勤後中学校に移動し、午前は附属中二年生理科を担当、給食前に附属小に戻り、午後は小学校での理科専科と、附属学校園を毎日行き来しました。今ではさほど珍しくない小中兼務ですが、その状況をあまり負担

に感じることなく楽しく小中で勤務できたことが思い出されます。

公開研究会では、毎回理科授業を公開しましたが、授業は下手でも、何か提案性のある授業ができないものかと、苦心した記憶があります。ある年の冬の公開研で、「環境」を扱う単元において、子どもたちが各々のテーマについて実験計画を立て、調べる授業を行った際、三階の理科室まで原付バイクを運び上げ、排ガスを調べる実験を行いました。子どもたちの追求したい気持ちで、どうにかして実現したいという思いで、授業を作り上げることができたのも、附属小の子どもたち、同僚の先生方、附属小ならではの校風のお陰であったと今となって思うところがあります。様々な経験を積むことができ、教員としての幅を広げることができた五年間でした。

(在職期間 H十五年四月～H二十年三月)



## 思い出すること

佐藤 稔

作文というものが苦手で、できればそうした世界とは無縁でありたいと願っていたのに、何の因果かいまだに文章作りから縁が切れていない。

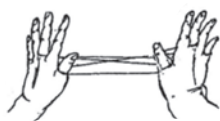
附属校園長候補者選考委員会というところから断らないようにと釘をさされた。給与生活者としては断る理由がないので受け入れた。結果、附属小学校校長併任の辞令を受けることになったのだが、皆目知識のなまま任務に臨まざるを得なかった。周囲からは、万事副校長が取り計らってくれるから心配する必要があると言われ、諸行事の挨拶と教育委員会との人事交流の相談、事件事故の最終的な責任を負うことが校長の職務だと聞かされた。最初に直面したのは、始業式・入学式の式辞だった。何かひな型があればそれをアレンジして済ませられるだろうと思っていたが、机の中にもパソコンのファイルにも何の手がかりもなく、自力で作文しなければならぬ事態に気付いた。慌てて校歌や校史、校務分掌、内外の環境、保護者の期待することなど、即席

漬けを作るような気分で学習して挨拶文を作成した。思い返せば冷や汗ものである。私の気分としてはヘリコプターで敵陣降り立った将兵だったが、教職員の皆さんが好意的に接して下さったお陰で「大過」なく任期を終えることができたと感じている。

最初の年には、合唱部の全国大会出場のこと、アルヴェで報告演奏会という時に、エレベーターに閉じ込められるというアクシデントがあった。副校長の適切な判断と処置で事は収まったのだが、非常時に備えた危機管理体制の重要さを思い知った。

最後の年度、十二月二十二日、附属中学校の入試の日、六年生の諸戸陸君のご一家四人が不慮の火災で亡くなるという悲運に見舞われた。学校近くの通りを霊柩車が別れを告げるとき、子どもたちが発した悲鳴を忘れることができない。

(在職期間 H十七年四月～H二十年三月)



## 恵まれた教育環境の中で

千葉圭子

附属小学校の自慢といえば、無限の可能性を秘めた子どもたちと教育愛にあふれる教職員です。それに加えてもう一つ、施設設備の素晴らしさだと思っています。自動ドアの入り口に吹き抜けの玄関、子どもたちの歌声が響くはとの子ホール、司書教諭の手により大量の図書が使いやすく整備されたメディアルーム等々、明るく、美しく、機能的に作られている校舎は、秋田県内だけでなく、広く県外にも誇れるものです。

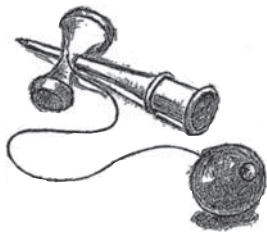
ただ、教頭として在職していたときに気になっていたことは、学年のトイレに男女それぞれ一か所しか洋式がなかったことでした。一年生の子どもたちが入学して間もない頃は、洋式トイレに十人以上が列をなし、和式トイレを使用する子どもがいない状況でした。「なんとかできないものか」と思案していましたら、創立百四十周年記念式典の祝賀会の際にチャンスが訪れました。学部長先生が私を手招きし、「学長先生にトイレのことをお願いしてみたら」と耳打ちしてくださったのです。早速、学長先生に

トイレの状況をお話すると「洋式トイレにするのは、一年生だけでよいのですか」とお尋ねになり、思わず「できれば全ての学年を」とお答えしたところ、学長先生は、上機嫌に笑っておられました。内心「欲張りすぎたかもしれない。」と後悔していたのですが、なんと、工事はすぐに始まり、翌年の十月には、全ての児童トイレが洋式へと生まれ変わったのです。ゆつくりと安心した様子でトイレを使用する子どもたちの姿を見るたびに、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

これからも附属小学校の子どもたちが恵まれた教育環境の中で伸び伸びと成長することを願っております。

(在職期間 二十四年四月～二十七年三月、

三十一年四月～三十四年三月)



## 附属小学校での授業の思い出

林 信太郎

私は、平成二十六年からの三年間、附属小学校校長をさせていただきました。火山学が専門で、フィールドワークが私の主な研究活動です。校長時代も周囲のご理解のもと、何度か遠方に調査に行かせていただき、どうもありがとうございます。阿蘇の火山灰調査では、放牧している赤牛に取り囲まれるという体験などをいたしました。角が立派なので怖いんですね。牛を入れておく柵の中に逃げ込んで無事だったのですが(人牛逆転)。校長先生がそんなことをしているなんて、附小の子どもたちは夢にも思わなかったことでしょう。

私は「火山学」が専門でしたので、子どもたちに、何度か授業をさせていただきました。附小の子どもたちは反応が良く、聞くところはしっかり聞き、発言すべき時は活発に発言します。これも副校長先生を中心とした学校経営が非常にうまくいっているためだと思います。

さて、附属小学校で授業をしていて驚いたことがあります。私は、出前授業経験が

たいへん多く、四百校ほどは回ったかと思  
います。全国の小中高等学校で授業をした  
のですが、こんなことがあったのです。

その授業はたいへん順調に進み、予定よ  
りも十分ほど早く終わってしまったのです。  
「どうしよう」と思っていたら、手をあげ  
て発言する子どもがいました。「〇〇〇につ  
いて、お話ししてほしいと思います」。

いやあ、びっくりしましたね。授業の場  
で堂々と提案してくる子どもがいるとは。  
こんな提案をしてくる子どもは、北海道の  
遠軽町にも和歌山県の串本町にも、秋田県  
の他の学校にもいませんでした。

小学生ですでに自立して、自分で考えた  
意見を、皆の前で積極的に発言するとは。  
どんな大人になるのかとても楽しみです。

附属小学校の教育目標は「自律」です。  
子どもたちには少し難しすぎるかなと思っ  
ていたのですが、そんなことはありません  
でした。しっかりとその姿で「自律」を見  
せてくれたことに、校長という立場ながら  
非常に感心したのです。

(在職期間 日二十六年四月～日二十九年三月)



秋田大学学芸学部附属小学校  
(1963年 東根小屋校舎 旧日赤病院付近)



▼秋田県女子師範学校附属小学校時の校舎  
(明治6年よりの附属小学校の歴史は、本記念誌沿革略史に詳しい。)



▲校旗「朝日に匂う桜花」昭和14年制定  
(100周年を機に、補修、復元される)

秋田県女子師範学校附属小学校  
(附属小創立110周年記念誌より)  
(旧日赤病院付近)



附属小創立120周年記念航空写真  
(1995年 撮影)



▲昭和37年12月より附小校舎となる。  
昭和52年度大改修により、現在の姿となる。

◀校旗「平和の鳩を守るべし」昭和29年制定

前秋田大学教育学部附属小学校  
(1995年 現附属中学校グラウンド周辺)

【拾華会創立百二十五周年記念座談会】 令和七年一月二十三日

会場 附属小会議室

出席者 敬称略・在職年代順（在職期間）

佐々木良三（昭和三十四年度～昭和四十三年度）

元秋田大学教授

芳賀龍平

（昭和六十年～平成四年度、平成八年度～平成十年度）

元副校長

濱田 純

（昭和六十一年～平成二年度、平成十一年～平成十七年度）

元副校長

大島博子

（平成二年度～平成七年度、平成二十一年～平成二十二年度）

元副校長

京野真樹

（平成九年度～平成十九年度、令和五年度～現職）

現副校長



司会…拾華会の創立百二十五周年を記念して座談会を始めます。限られた少ない人数ですが、皆さんで想い出話に花を咲かせ、楽しんで参りたいと思います。

最初は、佐々木良三先生から歴史的な当時の思い出深いエピソードなどをお聞かせください。

### 東根小屋町時代

佐々木良三…東根小屋町の思い出ですね。これですよ（写真を指差して）、大変でした。

私はまだ若かったので、よく宿直をさせられました。「今日、頼むぞ。良三しっかり、頼むぞ」と。宿直手当はすぐくて、四百何円とか六百円ぐらいはもらった。当時、給料一万円くらいでしたからね。一泊寝るだけで六百円というのは、大変な金額でとても嬉しかった。

夜になると駅前ですから、いろんな悪者が入ってきて、毎日泥棒が入ってという噂で、みんな恐ろしがつていた。

ある時小遣いさんが、夜中に「また、泥棒が来てるし、先生、捕まえねしか」と。泥棒を捕まえるのは、警察の仕事でしたが、

「やろうか」っていうことになり二人で捕まえました。

給食室が一つあって、泥棒はそこでご飯を食べていました。ほんと、食べ物がないくて、夜入ったんでしょうね。私達、懐中電灯を用意して、両方から挟み撃ちに、戸を開けて、今だったらおっかなくて、誰もそんなことしないんですが。何も恐ろしいとは思わないで、私が「こらっ」って言ったから、黙って、「すみませんでした」と誤りました。手におにぎりを持っていました。あれ、握ったんだね。給食の残りがあつたのを、毎日狙ってくる泥棒がいたり様々。東根小屋町の印象は、とつてもその泥棒の印象が強いです。

### 保戸野への校舎移転

移転の時には、シンボルの銀杏をどうするか、あの大きい銀杏を保戸野に持つてくるっていうのは大変なことでした。自衛隊にという話もあったのですが、確か造園業者が持つて来て、置いたんです。

問題は、先生達に見える庭、あそこに昔の師範学校の庭がありますが、これを芝生

にしようという案があつたんです。芝生が西洋から日本に移ってきて、とてもきれいだ。しかし私は大反対で、もっと新しい彫刻にしよう。庭は彫刻だと思わせるアートにしようと思ったからですが、「せば、お前やれ」って。それで私が設計しました。

まず、この世にない形を置きたい。見ないような、変だなって思うものがないだろうかと思ったら、斜めのニューっとした形が思い浮かび、石でね、それをやりました。昔のコンクリートだらけの庭の中に、阿部米蔵先生の彫刻を、今ここに移してありますね。冬にはちゃんと蓋をして、雪が上がつてもいいように。

保戸野に移した時に阿部米蔵先生に、一番にシンボルになるものを置いてほしいとお願いしに行ったら、「分かった。良三、お前も附属に行く時には俺の言うこと聞いたから、俺も頑張るぞ」という一言。

私、組合運動をやっていたものですから、「附属に行きたくない」と言ったら、阿部先生が、「それはだめだ」と怒ってね。私はこんなに素晴らしいところに来たので、なんとか先生にお願いして、形にしてやろう

と。

保戸野では、あの池に、子どもが落ちて、私、助けたことが二度あるんです。そのくらい、池はやつぱり危険なんですよ。

小学生が落ちるんではなくて、親がPTAに来た時に連れてきた、小さいお子さんが見えなくなり……。水遊びが好きだから、落ちるといことがよくありました。

いずれにしろ、附属は、こうしてだんだんだんだん移っていき、すばらしい学校になりました。

学校に入るところは、よく間違いました。戸を開けて入る学校なんて、生まれて初めて。学校なのか、校庭なのか、どこの家の畑だか分からない所に、みんな自由に裏の人も誰でも入ってきて、学校を使ったものです。今は、難しい時代ですね。

附属小は、みんなコンクリートでした。

頑丈なコンクリートで、子ども達があちこちで怪我をすることが多くて、すぐにお医者さんに走るようになっていました。当時ハイカラで、私の車と校長先生の車が日産モデル。しょっちゅう故障しましたが、よく子どもを運んで貢献しました。階段も全部

コンクリートで、びっしり固められたので危なかったんですよ。子ども達は階段よりも手すりの所がつるーっと滑るものだから、見てないと手すりに乗っかって、落ちて、頭打ったとか。

それから、やつぱり窓が大人用でした。高くて外が見えないので、子供が上って、結構下へ落ちて、ちよつとくじいたとか、そういう怪我がすごく多かったね。

当時の先生達っていうのは、みんな変わった先生方で、とにかく俺たち選ばれているんだと、そういう自負があったのか、もう研究だけでしたね。子どもが帰るといんなことをやりました。

私の先輩の大友康二さんなんか、先生方もっと仲良くレクリエーションやりましょうと。子どもを帰したら、ソフトボールを先生達でやろうと。

朝の会に、試合の成績表が出てきて、三打数三三振だねとか、朝の会にそんなことを言われて。附属って勉強するところかなと思ったら、野球でも、何でもやってもいい、とても自由なところでした。

先生達はなんか文句があると、「良三、今

日は残りなさい」という、偉い先生達がいてね。「お前、今日、ろくなこと言わなかったんじゃないの」と。「このことは間違ってる」などと言われて、はつきり朝に言われて、夜に怒られました。でも、怒られるたびに仲良しになってね。

### 研修旅行の飛行機がエンジン停止

ある時は飛行機に乗って、附属小の先生方が全滅するところでした。北海道に行った時、飛行機のエンジンが止まって落ちそうになり、函館空港に緊急着陸。

その飛行機は511という機種で、秋田空港から北海道へ飛んでいた飛行機で、その飛行機的设计者が、私の模型機のお師匠さんでした。お師匠さんの指導で、片側のエンジンが止まっても、片側のエンジンで十分に離着陸ができると知っていたので、その時私がみんなに「大丈夫、片方のエンジンで飛ぶから」って言ったのが、すごく印象に残っています。

あの当時初めての双発（2機のエンジンを備えている）の511、あの飛行機に偶然に附属小学校の全員の教職員が乗って、

落ちそうになった出来事です。

最初、エンジンから煙が出てきたんです。左側でしたけども、バースと煙。火が出なければ大丈夫だろうなって見ていたら、やっぱりパツパツと火が出てきたので、私がすぐにスチュワード스에「エンジンの調子悪いよ」と言ったら、スチュワード스가覗きに来てくれて、それからしばらく見てから、機長室に行ったものの、暫く来ないんですよ。故障することなんか、しょっちゅうありました。しばらくしてから、ドンドンと火が広がってきたので、とうとうダメだとなり、それで函館に着陸したのでした。

司会…芳賀先生は、今の校舎への移転前の校舎から始まりますね。

### 附属小学校に赴任して

芳賀龍平…昭和六十年四月附属小学校に赴任し、感じた事は教職員の皆さんが仕事に意気込みの強さを感じました。学校に課せられている目的をしっかり受け止め、仕事されていたのを思い出します。一人一人の教職員が自信を持っておられました。

初めに「五年生の担任で教科担任制です。」と言われました。自学級で子どもたちに触れ合う時間は、理科、体育、道徳、特別活動と朝、帰りの学級指導と給食の時間だけです。時間割によつては子どもたちに触れ合うのは朝、帰りの学級指導と給食の時間だけの日もありました。

このような状態で学級づくりができるのか不安でした。六月一週目の金・土曜日二日間に渡つて公開研究協議会が予定されていました。一日目は理科の授業提示、二日目は特別活動の授業提示という事です。

私が焦つたのは公開研究協議会までに子どもの名前を覚えること。一人一人が個性的で、その子なりの見方、考え方、感じ方等を捉えなければと計画をたて学級での生活を送つたことを思い出します。

公開一日目の理科の授業を理科室で行いました。県内外から多数の参観者、さらに秋田市理科教育研究会のメンバーが応援に駆けつけてくれました。身動きが取れない程の参観者でした。

公開研究協議会後の教官会議で「教科担任制と学級担任との関わりについて」話題

になりました。

学級は四十人の子どもと出会い、話し、互いに理解し、その中から思いやる気持ち・協力し合う心・助け合う心が自然に培われ、その上で子どもたちが安心して楽しく学べる場が出来ます。それを手助けするのが学級担任の役割で在るとすれば、子どもと担任とが触れ合う時間をもっと増やさなければならない。ということで、次の年度から国語と算数を学級担任が受け持つことになりました。

### 問題発見解決学習への挑戦

理科授業で初段階の事象提示に一番力をいれました。その事象を観察した子どもたち一人一人が「あれ!どうして」「不思議だな」と疑問を抱き、その疑問からグループごとに学習プランを作り、学習を進めていきます。頂上は一つで登山口はいくつもあのような学習法です。

附属小理科部で考えた理科学習方法における「問題発見解決学習」が他学校でも通用するか確かめるため「三十二回ソニー教育資金」に応募しました。結果は優秀賞を

受賞しました。

認められたことにより、さらに実践・研究を高めようと機会を捉え、研究先進校を訪問したり、都立教育研究所や国立教育研究所などを訪ねて指導をいただきました。

### 附属小の先輩・仲間たち

大島博子…私は平成二年度から七年度までの六年間、教官として勤務しました。すでに二人の息子が附属小学校に在学しており、PTA会員という立場で関わっていましたので附属小学校はとても身近な学校でした。

旭北小学校から転任しましたが、当時、附属小には、佐良土惇先生や進藤彰一先生という音楽教育の大御所がいらしたので、事前に附属小に異動と知った時は、憧れの大先輩と一緒に仕事ができるという喜びしかありませんでした。でも、四月に赴任したら、そのお二方とも昇任して他校に転出されました。そのため、若輩者の自分が学年主任・音楽主任、さらには合唱部の主担当であることを知ってびつくり仰天でした。幸いにも、それまで公開研究会の多い学校ばかりに勤務していたので、どうにか音楽

科の研究に力を注ぐことができました。

でも新しく経験することが多くて、慣れるまで戸惑う日々でした。それを救ってくれたのは同じ音楽科の同僚、柴田久美子先生でした。お人柄はもちろんのこと、研究に関しても常に前向きで、一緒に一つ方向に取り組む相棒として力を尽くしてくださいました。初年度に、夜な夜な連絡を取り合い、全学年の指導計画の新たな冊子を必死で完成させたことは、今でも忘れられません。柴田久美子先生とペアを組んだ二年間はとても幸せでした。今でもお声がけいいただき、嬉しいご縁がつながっています。

平成二年度に一緒に転入したのは、佐々木久春校長先生をはじめ、佐々木靖治先生、奥山正通先生、佐々木由喜子先生、佐藤真先生、石郷岡千鶴子先生の七名です。新メンバーで四月四日にはさっそく親睦会を開き顔合わせをしました。まだ附属小という魔界を知るよしもなく、笑顔で出会いを楽しんでいる当日の写真が手元にあります。よき仲間と一緒に新たなスタートをきれたという思いで、ひとときを過ごしました。

附属小に勤務して、あらためて感じたの

はとにかく研究を担当する教科は自分がエキスパートだという自信にあふれた方々の集まりであるということ。その姿や言動を刺激にして、自分も音楽指導ではこれまでの経験をふまえて存分に挑戦してみようという気持ちにさせていたのだし、覚悟もできました。当時は、公開研究協議会が二日間開催され、転入したばかりの私でも、六月一日と二日の二日間、二コマの授業を提示しました。今思うと実に驚異的です。

また、心に残っているのは、平成三年度に副校長が伊藤薫先生から羽川正先生に代わり、四年度までの二年間、文科省の教育課程の研究指定を受けたことです。近藤久隆先生をチーフに九つのブロックに分かれて、それぞれの窓口から研究を進めました。私は「音環境のプロジェクト」の主担当でした。全職員が図工室に集合して、近藤先生の指導のもとで焼き杉でプレートを作りました。下書きされた近藤先生の独特で芸術的な美文字を彫刻刀で掘ったあと、外に出てガスバーナーで焼いて、音環境の案内プレートが見事に仕上がった時は、とても感動しました。研究だけでなく、何事も決

して妥協することのない職人氣質の近藤先生を皆が尊敬し、一目置いていました。超多忙で大変な年でしたが、この教育課程研究のお陰で、校内には教科研究だけでなく、教育環境という側面からも整えて子どもたちの学習を支えようという気風が高まりました。

教育課程研究指定となった年度は、秋公開になりました。私の持論として、学習指導は学級づくりという土台があつてこそ充実すると思つていたので、秋の公開研究会開催の二年間はとても満足でした。

一方で、平成五年度は、第41回東北音楽教育研究大会（秋田県大会）を附属小学校を会場に開催し、音楽の授業提示だけでなく学年の音楽集会も発表することになつていたので大変でした。公開研のおよそ一か月後でしたが、私の四年部は、学級担任が榎実和子先生と工藤聡先生、学年所属が阿部英子先生という超強力メンバーで、全面的に協力していただき、附属小学校らしい表現力あふれた音楽集会を創り上げました。四人の先生たちも子どもたちの輪に入つてリコーダーやギターの演奏で参加したこと

も忘れられない一コマです。あのみごとなステージは附属小学校の子どもたちと教師でなければできなかったと思います。

平成六年度の思い出は、なんと言つても創立百二十周年の式典です。児童会館を会場に開催され、各学年の代表による呼びかけと合唱部のドレミっ子（私が合唱部員に名付けた愛称です）が、オーブニングステージを華やかに飾りました。その式典を総括したのが、教頭の進藤由紀子先生です。綿密な計画のもと、テキパキとした指示で子どもたちや教職員を動かしてくださり、全職員が一致団結して式典を成功させました。当時の合唱部の懐かしいステージ写真が手元に残っています。

また、進藤教頭先生を中心に定期的に女性会をひらき、総勢十五名の女性教職員が親睦を深めて交流したこともありました。その会食会に撮った集合写真のみんなの和やかな顔を見るにつけ、忙しい学校ではあったけれど、お互いを認め合い、心のつながりを大切にしていていた時代だったことが伝わってきます。

## 新校舎移転時の思い出

芳賀龍平…平成八年四月に副校長として赴任しました。新校舎建設の工事はストップしていました。

新校舎建設現場に近いお宅に大変お世話になり、ご迷惑を掛けていたので大学の職員と共に挨拶に行きました。各家庭から種々苦情を聞かされ、また校舎についての希望等出されました。

地域・町内会の関係者会合を開催していただき「これらの課題や問題については解決すべく地域の方々とご相談をしながらやっていきますので、なんとか工事を進めさせてください」とお願いしたら、「わかった」と承諾してくれました。それからは工事は順調に進められました。

平成九年一月十六日に大学へ新校舎が引き渡されました。次の日から新校舎物品の納入が始まりました。それと同時に五・六年生のたてわり活動として印刷室・校長室・副校長室・教官室の物品を梱包する準備を行い、教職員は各研究室の物品の梱包に汗を流しました。

一月二十四日「校舎お別れ集会Part①」

を体育館の中央にステージを設置し、上には大きくす玉を飾り、会場内を暗くしスポットライトを使い雰囲気を出しました。各学年から感謝を込めた思ひ出話と学習発表や全員合唱やダンスでお別れ集会が最高に盛り上がり、子ども一人一人に大きな思い出になったことでしょう。

「校舎お別れ集会Part②」は一月二十六日日曜日でしたが、出校日にし、児童、教職員全員で大掃除を行いました。給食後、児童は机、椅子を教室から屋外へ移動し、その後新校舎に運び入れました。

二月三日(月)は臨時休業にし、四日の児童受け入れ準備をしました。主な作業として下足棚、雨具架け、ロッカー、机、椅子等への名札付けでした。午後には保護者にお手伝いをお願いし、明日の新校舎入校式の準備、ダンボールの後片付けや床の清掃、机、椅子、棚、ロッカーなどの水ふき等をお願いしました。

二月四日(火)新校舎入校式当日、児童は八時二十分まで旧校舎体育館へ登校し、学級担任が新校舎へ引率を始めると児童の笑顔はニコニコ・ワクワクで希望を持って

入校式に臨んでいました。

私の最後の九年の年は、隣近所の町内会で、街路樹を植えているところの下の方に、ちよつと隙間があるので、そこに花を植えましょうということ、そこに千鉢ばかり持っていて、町内会と学校と、四年生だったと思いますが、小学校四年生全員を四人ずつグループ組んで、そして一斉に花を植えたんです。

それをこの町内の人たちは、喜んでくれました。「一緒にこういう仕事ができるって、すばらしいよね」と。いろいろ協力していただいているようなので、今後も続けられればいいんじゃないかと思っています。

司会…京野さんはずっと二十年まで在職で。

京野真樹…平成九年からでしたね。

司会…初めてここに来た時の印象は？

京野真樹…私は、ここに来る前に初任の学校で笹山洋希先生と横手の学校で同職をしていたので、笹山先生が私よりも三年早くこの附属小学校にいらして、時折会々と「附属の研究が非常に進んでいる」と。

ほんとに日本の国内、どこ見ても、先進校だと胸を張れる研究をしているということ、随分その当時から誇らしげに吹き込まれていました。

横手の先生達も、「附属の公開に行けば、今の秋田県の動向が分かる」というふうに、皆さん、おっしゃっていて。これからは、個性化の時代だろうとか、そういうことを既にもう平成一桁台の頃に、横手の先輩の先生達が附属の公開で学んできて、それを私たちによく聞かせてくれていました。私がいざ来ることになった、三月の十三日、附属小への異動を言われたんです。

それで来たものですから、気持ちの準備もできていない。引越先も、最初の一週間ぐらいは決まらないままバタバタとやってきて、赴任して二日目で「4月の末に研究授業、特活やれ」。それで、「公開の単元名は一週間後に出せ」と言われたので、もう泣きそうになっていました。なんていうところに来たんだと。

## 研究委員会の力

その時の先輩の先生方の印象としては、横手の時代に一緒にさせていただいた笹山先生はいたにせよ、やっぱり研究委員会が強かった。さつき、芳賀先生がおっしゃった通りです。校長、副校長の文書まで直しを入れるぐらい研究委員会が強かったです。佐藤真先生が研究委員長でした。

私たちは小さくなって、何か研究会とか、会議があっても、何も言えないで、最初は黙っていました。

当時は研究室が教科で分れていたのですが、今のメディアセンターの隣の所には、国語と社会が入っていたんです。

そうすると笹山さんはいら、堀川さんも社会だから、同時にいた。私がいて、濱松さんが当時いらっしゃった。時々教務主任だった、国語の佐藤敬子先生も研究室にやって来ては、お話されているという感じで、諸先輩方が研究室の中でいろいろと語って聞かせてくださるのです。それに私や堀川さんは感化されて、ずっといろいろ学びました。

それで、翌年から研究委員会に私と堀川

さんも巻き込まれて、いろいろと研究委員会の先輩方から、附属の研究とはなんたるかを、ほんとに薫陶を得たのです。そういう意味では自分の視野がものすごく広がった時代だなというふうにも思ったし。県や国をリードするような研究をしているという自負をしている先輩方と一緒に学ぶことができたので、自分のやっていることの意義とか、意味っていうのを改めて考える機会になったかなと思います。

教師としての意識を変える時期だったなと思いました。

### 学習指導要領の基

赴任してから数年間の研究の中で、印象に残っていることとしては、平成十年の夏から秋にかけて、今もうちの学校で評価基準にしている「資質・能力表」あれを各教科部の主導で作ったことでした。

今思うと、現行の学習指導要領の基になるものを作ったなと思っています。というのは、『資質・能力』という言葉がまだ言われていなかった時代なのに、上智大学の奈須正裕先生が本校に校内研でいらっしゃっ

た時に、初めてその話を聞かされて、それで研究部がどうもこれから資質・能力の時代になる。学力向上というのではなくて、子どもが問題解決をしていく中で、どういう能力を磨いているかというのを認知、非認知、含めて研究していくのがこれからの研究の最先端だっていうのを聞かされて。

それでうちの学校の過去の公開単元の記録を全部各教科ごとに紐解きながら、子どもがどんな力を付けて来たかというのを資質・能力という視点で新たに書き起こしていくという作業を平成十年の初めぐらいだったと思うんですが、ずっとやっていったのが、評価基準表。

だからまだ四半世紀、今も本校で使われていて、その意義も私が副校長として、それを先生方に、新しい先生達に伝えられるということはすごく嬉しいことだし、うちの学校の研究の伝統を引き継ぐという上では、すごく大きな仕事が出来たなというのは、今でも自負しているところです。

私、附属のあと、教育専門監で出た時に、早稲田大学の佐渡島先生という方から、その資質・能力表を送ってほしいと、ある会議で使いたのでと頼まれたんです。それが、

平成十九年か、二十年頃でしたね。

後から、ある文科省の資料を見たら、その佐渡島先生という方が、今の学習指導要領の前の学習指導要領を作る時のワーキンググループ、中教審のワーキンググループのメンバーだった。ちょうどその平成二十年頃、委員だったんです。

だから、うちの学校の資質・能力表がその会議で出されて、それで今の指導要領の資質・能力っていう考え方の基になったのではないかと思ったので、びつくりしました。

学習指導要領が新しくなってできて来た時を見て、なんと、うちの学校の資質・能力表に似ているなと思ったんです。

### 人材豊富な附属小

大島博子…私は平成二十一年度から二年間副校長として、また附属小に勤務させていただきました。つい、前に勤務した時代と比べてしまうものだから、附属小もずいぶん変わってしまったなあと感じるが多かったですが、それは時代の流れで当然のことだと納得して経営にあたりました。

管理職の立場から学校経営に取り組むにあたって阿部昇校長先生との出会いは大変ありがたかったです。私がそれまでの公立校での校長職の経験をもとに、附属小でもっと強化したいことや不足している設備などについて意見をお伝えすると、真剣に耳を傾けてくださり、その実現のために前向きに大学と掛け合ってくださいました。

たとえば、二十一年度は英語活動のネットワークスペースの配置、防犯学習の必要性や設備、特別支援体制や学習支援サポーターの充実など、公立小学校ではすでに着手されていることが、不足していたり、附属小であればもつとできるのでは、というようなことを提言すると、その対応や実現のためにすぐに大学に予算的な交渉等をし、大学との調整に積極的に動いてくださいました。実に頼もしい行動力のある校長先生でした。お陰で年度末には、英語の外部講師を五名も確保し、次年度も継続採用することができました。当時採用した英語外部講師は、現在も外国語活動で活躍しています。全職員が参加のもと、英語の校内研修会も複数回実施しました。また、防犯対策

としての「さすまた」の購入等がスムーズになされ、職員の防災訓練にも大いに役立てることができました。

さらに、学校運営にあたり、心強かったのが教頭の佐川真知子先生、教務主任の湊弘一先生、お二人の存在でした。佐川教頭先生は、教官時代にも同職した仲間でも信頼のおける方でした。以前と変わらず、誠実で冷静な言動にいつも助けられました。

湊先生はどんな激務でもいつも笑顔を絶やさず見事にこなしました。二人とも適切な仕事ぶりでした。湊先生は、「拾華会」事務局として、現在も財産として残る様々なデータベースを整えてくれました。また、当時の拾華会の会長は鈴木啓治先生で、拾華会の会議で来校されるたびに副校長室に顔を出してください、いつもにこやかに声をかけてくださいました。

「拾華会の運営は、あまり附属小の職員に負担をかけないよう、できることはOBの自分たちでやるようにしましょう。」と役員の方々に呼びかけてくださったのも鈴木会長でした。拾華会がうまく機能していた最高の時代だったなあと思います。

同職した教諭にも優れた力のある仲間が多数いました。学習指導に限らず、様々な活動を通して子どもたちの内なる力を引き出してくださった熱血先生、自分の特技や趣味を存分に活かして校外でも活躍していた方たち・・・など、懐かしく思い出されます。なかでも国語科の熊谷尚先生は、俳句の名人で、(Eテレの俳句王国にも出演) 自学級だけでなく他学級にも積極的に向いて俳句の創作活動を広げ、子どもたちに俳句の魅力を体得させてくれました。自分の得意とする能力を活かし、それを学校全体に広げて伸ばしていこうとする姿が他の教職員にもよい刺激になりました。

実は、今日の「座談会」におみやげをお持ちしました。「拾華会」をお題にした熊谷先生の俳句です。一昨日「一句でいいから是非」と急をお願いをしたにもかかわらずわずか二日間で七句も詠んで届けてくださいました。どの句から、拾華会員の当時の私たちの姿が見えてきます。悪戦苦闘した日々、研究会を間近にした時の附属小ならではの様子や想いも伝わってきます。是非、ご覧ください。

## 花時

熊谷 尚

- ☆ ほどの子の歌声乗せて春の風
- ☆ まつすぐな子らのまなざし虹二重
- ☆ 微論の果ての黙考戻り梅雨
- ☆ うづ高く積まるる書籍夜の秋
- ☆ 学ぶとは語り合ふこと黄落期
- ☆ まだ灯る研究室や寒北斗
- ☆ 花時や道を究めん拾華会

♪熊谷先生、ありがとうございました。

## 秋田「総合的な学習」研究会の設立

芳賀龍平…平成十年当時、附属小学校は「総合的な学習」の実践先進校として高い評価を受けていました。

文部科学省の発表で「平成十四年度に総合的な学習を完全実施」という知らせを受け取りました。それを受けて改めて全教官で研修をしようという高まりが生まれました。

教育実習校の附属小学校ということで「総合的な学習」を勉強し、研究・実践・開発を進める研究会を設立する事になりました。県内の教師に知らしめることが必要ではないだろうかという話題になり、学校を超えて研究会を設立することになりました。

平成十年二月二十二日(月)に附属小学校を会場に『秋田「総合的な学習」研究会』の第一回研究大会が、県内外から約二百名のご参加を得て開かれました。午前、五年生の総合的な学習「地域発!すてきな人見つけた」の公開授業と本会の設立総会。そして午後からは文部科学省教科調査官角屋重樹先生の記念講演が行われました。その後研究協議会に入り、どの会場も熱気でいっぱいでした。期待を受けて、会員数約二百五十名でいよいよ総合的な学習の研究が本格的に動き出しました。

京野真樹…その素敵な人の单元、多分私も授業者の一人で、いろんな所に出かけました。思い出しました。

ただ、私、附属小学校に教員時代から数えると十五年ぶりで戻って来ているのですが、実は、その間八年間ぐらいは指導主事

として公開研究会で参加していたので、附属小学校がどういう学校として変わってきているかっていうのは、実はなんとなく見てはいました。

もちろん、内情は知らないでいたし、コロナ禍真つ盛りの頃だったので、少しブラシクはあつたのですが、戻ってきた時に、先生達の指導力は、バランス良く、いろんなことができる人たちが多いなと感じました。これは多分この学校の伝統だと思うのですが、ほんとに何でも協力し合える仲のいい先生達がいらつしやるという点では、昔のままなんだと思います。

### 研究成果の全国発信を

佐々木良三…我々が求めるのは、附属小学校、がんばっているのは分かるけれども、どんな研究成果を全国に発信したのかというのを知りたい。ペーパーの時代だと「よし、今度は全国的な明治図書から本を出そう」と。それで各教科、これでいいかなと実践して、「ようし、熟している」ということで、出版物を出した時代がある。まだ残ってるかもしれない。それと共に、図工

・美術であれば、いろんな教科書会社に載せる作品とか、いろんなものが、全国の教育や学習指導に役立っているのを見たり、各教科書会社の表紙に載つたりすると、「ああ、附属小学校、また選ばれたね」と。なんか、我々拾華会としても、「ああ、がんばってるね、後輩、よくやるね」っていうふうなものが、少し見られるとありがたい。また我々も年だけいって、昔の学校だけではなく、何かどこか隙間があれば、集めたっていう気持ちは変わらない訳ですよ。

宣伝になるけれども、私はどうしても失敗だらけの幼児教育に対して、もう少し国民が目を向けてくれたら、この国は少しは違ってくる。だから幼児教育に対して力を入れた時代、戦中は、昭和の二十年頃からルーズベルト大統領は、アートを通して、もっと独創的な人間を育てないと将来は見えないと考えた。

道路を作ったり、ダムを作ったりするというのは、お金は儲かるかもしれないけど、それだけでは進まない。アートは違う。仕事を考える人間を作る。

そして日本と戦う時には、大砲を作るよりも真空管を作れと。そして潜水艦に探知機を入れて、今のデジタル社会が出来上がって、結局日本は、その最先端の半導体の鉱石ラジオから始まって、世界にあの鉱石、「半導体でこんなことができるの？」とい言われ、世界に誇った。

そして、ああいふ半導体は日本かなと思つたら、すっかり産業化しすぎて、研究分野がすべて台湾に行つてしまつたり、そういうことが私はすごく嫌で。こういう名前を付けた、「フライングアート」。これは私だけの名前ですが。今急にアメリカは大学の美術関係の名前を、美術大学と言わないで、フライングアートの大学っていうのが、増えたんですよ。これもかなり前だけでも。

なんで増えたのか、フライングアートっていうのは、純粹美術っていうんですよね。純粹な美術って何だろうと言うと、見えるものも、よく分からないものも、訳わからないものの中に、考えられない世界が入っていくと、そこで発展するっていうので、みんなこの名前に変えたの。それを私をもじつて、秋田に流行らせようとして、こういう

のを作って、全国から賛成する人を百三名  
いるんですが、これをやろうと。

そして大人だけのアートっていうのはプ  
ロだけでもね、子ども入れようと。子ど  
もの想像力っていうのは、さつきもちよつ  
と言ったけど、非認知能力です。これこそ  
がまだ我々がまだ手を触れたこともない、  
考えもしない世界が生まれるというので。

附属小学校に一人だけ若い先生がいるの  
で、あなたの学級、どんなうまくない子ど  
もでも全部出させてあげてと言ったら、喜  
んで、三十一名。二、三人じゃなくて、全  
部の子どもがどう動いたかで教育というの  
は決まるからね。附属小学校だけです。他  
の小学校は入ってませんので。

### 防水時計の先駆者

例えば、私の教職時代に、家庭科の専科  
の先生がいたんですよ。この先生の息子は  
附属小学校を出ているんです。そして、コ  
ツコツと頑張って、最後、東京工業大学を  
出たのかな。学校は大したことはないんだ  
けれども、その後は力があって、服部時計、

今のセイコー社の重役になって、日本で一  
番最初に防水時計を作ったんです。これは、  
誰も秋田県の人、知らないのよ。

防水時計、懐中時計ですね。これが、各  
社セイコー社以外も作ったんですが、「セイ  
コー社が一番最初に作った」と、本人が言  
っています。それが、試験の時なんか、私  
にもいっぱい時計が送られてきて、「この五  
つの時計を寝る時も起きる時も持たされて、  
海に入る時もみんなやってくれ」と持たさ  
れました。それで一カ月間生活した中で、  
どの時計にどのくらいの水分が含まれてい  
るかを、自分の方の工場で検査するからと。  
そして、とうとうセイコー社が一番となつ  
た防水時計を開発したわけです。今、各社  
みんなデジタルでも、防水で生活防水時計。  
その人、どこに行ったのかなと思ってい  
たら、私、うっかりしていて、東京オリ  
ンピック、あの時計のトップを井上あつし  
さんがやっていたんですよ。

私の先生も、井上あつしさんも、この前  
亡くなっちゃったね。

### モルガンスタンレー日本支店長

もう一人、杉山サトシっていうのがいる  
んですよ。それは疎開中、ちよつと私の家  
にも来たことあって。その人、戦時中、こ  
の附属小に入っていた。そうして、東京  
から来ていたちよつとの間しかいなかった  
が、附属小に入ったせいか、能力が違つて  
いて、英語を一生懸命、勉強して、戦後ア  
メリカに渡っていたの。

戦後、日本はお金に困っていた。だから  
日本の銀行にお金を貸す銀行を日本に作ろ  
うとして、アメリカがモルガン銀行、アメ  
リカのモルガンスタンレーという会社の人  
が、資本家になった、モルガン日本支店を  
日本に作ったんです。今は三菱なんだかつ  
て、名前は変わったけども。その一番に  
来た時の日本支店の支店長に杉山サトシが  
なった。これ、附属小学校出なんですよ。  
そういう人たちもいるんですよ、附属つてい  
うのは。国会でも、いろんな予算の使い方  
でものすごい叩かれたりしたけども、その  
度に杉山サトシ、モルガンの店長ですよ。  
今はモルガンなんて言うのと、大金持ち。こ

ういう人も附属小はどんどん輩出している訳ですよ。

これからは、附属小出身のあの人偉かったじゃなくてね、秋田県人でもよその県人でも附属小に行きたいっていう人を作っていくことが、我々の役目かもしれない。

だから、一応日本ではダメなんだけれども、学校が寄付を集めてはいけない、寄付行為。

附属幼稚園の園長だった時、とにかくしりぬぐいする為に大変だったけれども、やり方があるんですよ。アメリカ辺りは、すべて寄付金で賄っている学校がほとんどですよ。

何故、寄付ができないのかっていう、逆におかしい。使い方さえちゃんとすれば、国会なんか、みんな裏金っていう訳ではないけれども、堂々とお金をもらって、こういうふうに教育に使っていますというように、先生達を増やせ、教材や研究費もみんなやれるのに。日本だけが落ち着き過ぎてる訳です。

だから、隙間を効率的に探していかない。専科もない附属小学校なんて聞いたんですが、そうなのかと。あの余剰人員な

んて言うのは、かつて大学から応援してもらって、七人まで増えた時代もあるんですよ。教室なんか、美術室も二つも三つもあって、もうどこにも物を置けたり。今は、この狭いところで、何もできないですよ。

### 附属でなければできないことを

私が附属にいた時代に、渡邊八郎という美術担当の先輩の先生がいました。土崎在住の先生でした。渡邊先生は、剣道の指導に熱心だったため、附属小学校での美術教育の実践と研究は、ほとんど私に任せっぱなしでした。しかし、渡邊先生は、私の実践を評価してくれて研究論文として発表するよう勧めてくれました。私たちの実践に関心を持ってくれた東京教育大学附属小学校の教員が、「この実践は面白い、秋田に行ってみよう」と本校を訪問することになり、私の学級の授業をみてくれることになりました。このことがきっかけで、東京教育大学附属小学校との共同研究が始まりました。さらに、指導要領改定に係る東日本地区の指導主事研修会の会場が附属小学校となり、

公開授業を私の学級が引き受けることになりました。授業当日の話だけど、今まで何もやらなかった子が、そういう時になるとね、張り切つて。附属の子、分かるでしょ。普段だとおしゃべりして、何もできないけれども、研究会になるとスパッと手をあげたりして、とんでもないことを言うのが附属小学校の子。これを利用したら、私の教室ワヤワヤしていても、そういう先生達が来て、「わー、どうやったの？」なんて声掛けると、堂々と説明している附属の子ども達。先生もいけれども、子ども達も素晴らしいな、教育熱心な親から生まれた子どもが来ているので。

だから、少し附属の先生達は、勇気をもってほしいね。あれやってはダメ、これやってはダメだってことは教育にはないような気がするのです。

これから、アートの場合も非認知教育ですよ、ね、この辺の開拓は、全く日本はだめ。全くどこもだめ。こんなこと言っていると、「佐々木、お前がやった、この秋田の附属小学校の研究テーマ、これを使って全国大会やりましょう。」ということになって。附

属小学校が、その県そのものが、教科のそのものが全国大会のテーマになって、秋田でやったことが、学習指導要領の十年毎に改訂されているので、その度に指針になればと言うので、研究実践してまああの評価を得ている訳です。

閉じこもらないで、いろんなことを朗らかに挑戦してほしいと思う。失敗したっていいし。いろんなことに挑戦するから、時には失敗もあるからね。

### 附属小学校・拾華会に期待すること

司会・座談会を閉じるに当たって皆さんから最後の一言を考えていたのですが、今、良三先生が期せずしてこれからの附属小学校に期待すること、拾華会としての期待などをお話になりました。

最後に一言ずつ、京野先生、大島先生、芳賀先生という順番で、どうぞ。

京野真樹…今、二十代の先生がすごく割合的に増えてきています。若い先生の研修をどうしていくかということについて、県や国に先立ってやっていることが少し実を結びつつあります。うちの学校の研修体

制が今年総合教育センターの研究主任講座でも、モデルとして提示されるなど、それこそ今、良三先生がおっしゃった、うちの学校の今ならではの取り組みが、少し県からも国からも注目されてきております。

そういった意味で、研究成果の刷新が進んでいるなということが感じられます。

また、今子どもがものすごく減ってきていて、教員の志望者も減っているというところから、教員不足も深刻化してきておりまして、いよいよ今年から募集人員の大幅削減も検討し始めました。

そうなると、うちの学校も専科の加配だとか、それどころでなく、学級減も行ない、教員も教科部もみんな一人の形でやっつかざるを得ないような時代が、もう近い将来、数年後には来る可能性があります。

ですので、そうした中で教科の枠を越えた研修をしていきながら、二つ、三つの教科について、専門性が高い、若い人材をここからどんどん育てて、県のリーダーとして出していきたいと考えて、先生方にも伝えていきます。

子ども達に関しては、先程、良三先生が

おっしゃったように、個性的で、いろんな能力を持っている子ども達がいるので、その子ども達がどんな社会に進出して、多くの先人たちがやっていなかったような新しいことをどんどんやっていけるような人材が育つように、伸び伸びとできる教育課程をこれからも作っていききたいと思っています。

拾華会は、この先輩方の偉大な業績というのを私達、分らないまま試行錯誤しているところがすごく多いので、拾華会員だった教員がここに、私のように副校長とか、教頭とかとして、そして、附属の伝統をちゃんと語り継いでいくという役目を持ちながら、現職とそれからもう卒業された先輩方とのつながりをこれからより一層深めていくことが大事だろうなというふうに思っております。

そういった意味でも、ご声援、ご支援お願いしたいなと思っております。

司会…ありがとうございます。

大島博子…今朝、テレビのニュースで米国の野球殿堂入りしたイチローさんがインタビューを受けていて、わずか一票足りなく

て満票にはならなかったけれど殿堂入りしたことをどう思おうかを訊かれていたのですが、「一票入らなかつたことは、ちつとも苦にならない。逆に燃えてくる」と返答していました。そして、完全でないからこそ次に進めるのだと応えたイチローさんが着ていたTシャツには、小さなドアのイラストが描かれていました。その考え方を象徴するのがあのドアだったのだと受け止め、その見事な考え方に感銘して、画面のイチローさんについて拍手をしてしまいました。

イチローさんの足下にも到底及びませんが、私は、附属小学校に勤務させていただいて、未知なるものに向かって自分が創り出していく探究の姿勢を学びました。学習指導において自分なりの手立てを工夫して追求することの喜びも味わわせてもらいました。同時に、同職した仲間や子どもたちからも学ぶことがたくさんあり、そのどれもが私の宝物になりました。

今回、前鈴木会長の拾華会周年行事の提案をきっかけにこのような「座談会」や「記念誌」の作成、さらに「記念祝賀会」の開催に取り組んで、今までにないことに向か

つていこうとするチャレンジもまた、私たちが附属小で身に付けさせていただいた精神のあらわれのような気がします。

年に一度の「拾華会」のつながりの中で、お世話になった先輩にお会いしたり、後輩と言葉を交わしたりして、自分が得た過去の宝物をもう一度掘り起こす、そんな機会にしたいと願っています。お世話になった附属小学校への感謝の気持ちを忘れずに、みんなの熱い想いを紡いで、歴史ある「拾華会」をこれからもしっかりと引き継いでいきたいと思います。

司会…ありがとうございます。

芳賀龍平…県内の児童の現状は「いじめ」件数は増加傾向であり、不登校児童が増えていることから、特別活動の経験をより多く重ねることを期待します。公開を是非お願いします。

集団活動を通して、心身の調和のとれた発達を図り、個性を伸長し、集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を作ろうとする自主性、実践的な態度を育てることこそ一番大切なことと考えます。特別活動には道徳・生徒指導との関連が深

く、一人一人の児童を常に目の前にし、個人のもつ可能性を最大限に伸ばすとともに、自己実現を図ることのできる資質や態度を育てたいです。

拾華会に期待することは、より多くの会員の皆さんに総会・懇親会に参加していただきたいことです。そのためにはどうすれば良いでしょうか。・・・？

座談会終了



## 【資料】

### 拾華会考

梅津 正雄

#### 会の発祥

昭和五十一年六月十二日に発行された拾華会会員名簿によると、会員No.1として八代久太郎氏（在職期間：明治三十三～明治四十五・八）を筆頭に、以下年次順に代々の会員氏名が記され、その一番終わりはこの名簿発行年の現職員惣田幸子さんがNo.284として載っている。これによって拾華会は、明治三十三年に始まったという推定が成り立つ。明治三十三年は昭和五十八年の現在から逆算すると八十三年前のことになる。つまりそのときの附属小学校の職員の上席教員は八代久太郎氏（秋師 明治三十年卒）で拾華会員の第一号となったのである。

また、附属小学校は明治七年の太平洋学会の組織された明治三十三年から、二十

八年も前にさかのぼる。

#### 会名称の由来

次は拾華会という名称はどういう意味をもち、どういうところから出ているかを探らなければならないが、その記録もないという。そのころの人たちはみな故人である。そうなると拾華会のこととは辞典などによって一般的字義から推測するよりほかになる。そこで先ず県立図書館の漢和辞典や国語辞典などに当たって調べてみた。しかし、この拾華という熟語はどこにもない。漢字の最高多数を集録しているといわれる諸橋博士の大漢和辞典の中にもそれがない。それで筆者は国漢の有識者たち数人を訪ね、そのことについてのご意見を伺った。その結果、これは明治三十三年、拾華会の発足当時の附属校職員、即ち拾華会員たちが、何かのヒントをもとに作った言葉、いわゆる新造語であろうということになった。いずれ由緒ある語であれば、何かの辞典に必ずあるはずである。それが無いとすれば、当時の人々の造語だとみな

なければならない。造語となれば定まった個性的な意味がついていないので、どういう意図をその新造語に、作者たちは折込めているかということとその後続の人々が推察したり、推量したりしなければならぬことになる。

ところで、推察、推量といっても何かに視点を定めて、それを機縁とした考察でなければならぬことになる。そうした立場のもとに拾華という語の最も重要な意味をもつと考えられる華の字の探究から始めることになった。華の字にはおよそ近い意味がある。大体は美風、善行の意味が多いがその反対のマイナス面の意味も含まれる。もちろん拾華となれば、美風、善行のプラス面をとりあげて、その実現達成を目的とすると考えねばならない。

拾華会はそうした理念のもとに会員の和衷協同を図ってきた麗しい親交研修の団体であるといわなければならない。こうした立場で次のような会の綱領というべきものにまとめてみた。

## 会のモットー

- 一・われわれは何事にあれ、その道の奥にひそむ真理を探し求めて前進していかねばならない。
- 二・社会道義を確立することは、われわれに与えられた大きな課題だと観念してその実現を懸命に努力していかねばならない。
- 三・高雅な情操はこの人生を最も美しく優しくいづるものと考え力を合わせてその涵養を図っていかねばならない。

以上は筆者の浅学、菲才で拾華会の心象を正しく把握しているとは思わない。むしろ不備、不全に恐縮するばかりである。どうか諸彦のご叱正を切に願う。

なお、過般の総会の節、話題になったことのうち、重要だと思われることをここに追記してご参考に使いたい。

一、元当附属校の主事で、その後東京教育大学教授に栄進された渡部正一先生の拾華会に就いてのご所見。

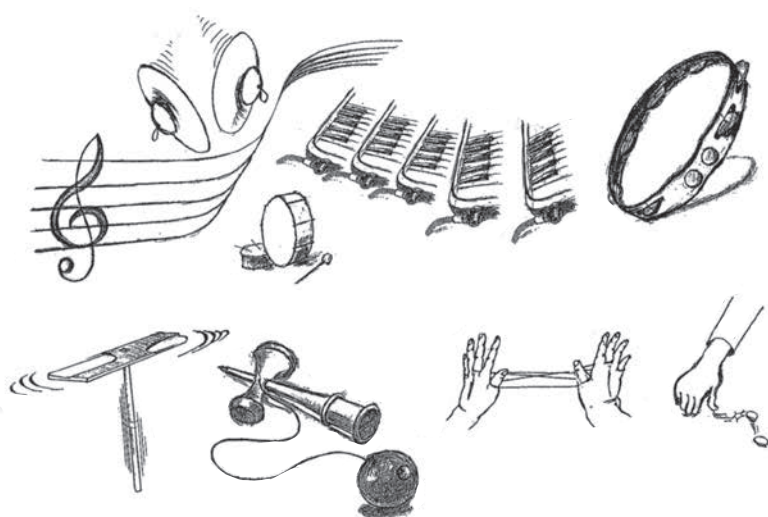
「拾華会は美しい名である。これはこの間読んだ世阿弥の能楽論の中の”拾玉得花”

という言葉から出たものでないかと気付いたが如何ですか」

これは貴重なご意見として拝聴し、これをよく考究してみたい。

二・秋田市根小屋町に道を挟んで女子師範校舎と附属小校舎が向かい合っていたころ、女子師範の講堂に”捨華養徳”という雄渾な大文字の横額が掲げられていた。根本羽嶽（諱、通明、文博、東大教授、本県出身、漢学者）の書である。われわれは「本校（女師）では捨華、附属では拾華、とはおかしいものだ」と語りあったが、いまは何もおかしいことではないと考える。大体、華の字には明、暗二様の意義がある。「美しいもの、光華、すぐれたもの、礼文盛んなもの、学徳あるもの」等々は明の部類、これに反して「ぜいたく、おごり、華奢、奢侈、虚飾」などは暗の部類。随って拾うべき華もあるし、捨てねばならぬ華もある。英知によって判別された拾と捨である。そこで、拾華会はその本性に従って理想性、貢献性を發揮していけばよいし、捨華はその作用によって社会の質実性、健全性を保持していけばよいのである。

（以上）



## 編集後記

寄稿してくださった会員の皆様、そして座談会参加の皆様、ありがとうございます。ようやく完成にこぎ着けました。

改めて読み返してみますと、お一方お一方の顔とその時代時代の附属小が浮かび上がって参ります。なんて附属小って素敵なんだなって改めて感慨を深くしております。そして、その一員であったことの幸せを噛みしめ、私にとっても附属小時代が教職生活の要時代であったことを認識させられました。願わくば拾華会員全員の寄稿が適ったならばどんなにかリアルで素晴らしい附属小記念誌になったのかと想いをはせております。

秋田大附属小は常に未来を見据え、十年ごとに改訂される学習指導要領改訂の先を走っていたのだと痛感しました。それは何よりも歴代先輩諸氏の自由でありながら自己に厳しい授業実践と実証研究の積み重ねが校風になっていたからだ

思います。

時は流れ、令和になってもその校風は変わらず脈々と受け継がれています。

日本の教育は今、大転換期を迎えています。一般的な教育世間は時代の流行を追いかけているようにも見えますが、秋田大附属小にあつてはなにも恐れることはありません。紆余曲折はあるにせよ伝統を受け継ぎ、未来の次代を担う子どもの育成にこれまでと同様に真摯に向き合い、自律した子どもの育成に邁進するところが、日本の新しい社会を生み出していくものと確信しています。

現職の皆さん、私たち拾華会は皆様を全面的に支えて参ります。頑張りましょう。エールを送って編集後記といたします。

濱田 純

拾華会 創立125周年記念事業組織

|                          | 氏 名   | 役 職  | 係分担         |
|--------------------------|-------|------|-------------|
|                          | 芳賀 龍平 | 顧問   | 総務（記念祝賀会相談） |
|                          | 相場 郁子 | 会 長  | 総務（記念編集相談）  |
| 総務委員長                    | 佐藤 俊彦 | 副会長  | 総務（全体調整）    |
| 記念祝賀会実行委員長               | 大島 博子 | 副会長  | 記念祝賀会       |
| 委員                       | 越中谷俊悦 | 理 事  | 〃           |
| 委員                       | 佐藤 敬子 | 理 事  | 〃           |
| 委員                       | 清澤 桂子 | 理 事  | 〃           |
| 記念誌編集委員長                 | 濱田 純  | 理 事  | 記念誌編集       |
| 委員                       | 柴田 文平 | 幹事長  | 〃           |
| 委員                       | 柴田 彰  | 理 事  | 〃           |
| 委員                       | 佐川真知子 | 幹 事  | 〃           |
| 委員                       | 濱松 寿  | 幹 事  | 〃           |
| 委員                       | 渡 弘一  | 幹 事  | 〃           |
|                          | 京野 真樹 | 副校長  | 総務（校内調整）    |
|                          | 菅野 宣衛 | 教 員  | 記念祝賀会       |
|                          | 渡部 和朝 | 教務主任 | 記念誌編集       |
| ※ 令和7年5月28日 拾華会理事会において決定 |       |      |             |

創立百二十五周年記念誌

校庭づいて

発行 令和七年十月

発行者 秋田大学教育文化学部附属小学校 拾華会

印刷所 株式会社 塚田美術印刷

秋田市大町二丁目六番八号

電話〇一八（八二三）五五五一（代）



